自煐奏録

十一

昭和七年十一月起筆

特別
イ4
1919
447

176712

自娯老録

昭和七年十一月以降

○学問知識の糧を供給する家は何家と云へば誰のも
その校や図書館、此と云へ、それに違ひないが、其おもむき
ある。それの本屋である書肆である。書物の豊富を誇す
んば大なる図書館を推さねばならん。単れ読書慾を
満足せしむるのみならば、図書館に日参すれば目的は
達する、しかし読書人の慾は別にある。乃ち獲得慾が多
分のあるとして此慾を自
くり読書人に附き纏ふ。ちょうど図書館の蔵書は
吾人のものとすることが出来ない。獲得慾を満足せし

(この光) 種二スリブリ・スキエむ図に船

(る嫌に意厚の氏人道ましまし　ゴィデンサ在)

38- 9233

もるこのハ本屋である。本屋ハ獲得慾ニ動する供給者
である。個人ニ對するのみでなく、図書館に對しても供
給者である。図書館ニ備つてゐる書物を補填す
るハ此の供給者の職らるべき。
大体ニ於て図書館と書物屋の間ニ以上の相違があるが、
あ者ハ動る緩の近かいものであり、可なり似寄りがある。
書物屋ハ店頭ニ多くの図書を陳列して、顧客をして
任意ニ選らしめる。集の書ハどんな体裁であるか、集
の書のハ幾冊であるか、その内容ハどんなであるか、と
云ふことをきことを大略なりとも知ることが出来る。図書
館ひも借り出して見ハ図書のことが知れるけれども、
相当手数がかゝる。書庫ニ入ることが出来ないハ、

複原製

書物屋の店頭ニ選るように多量の書物を指し
得ないまゝ、見ハ許されてゐるハ。書物屋の便利である
ことハ先づ此點にある。敢て購ふ意あるのあらずして、店
頭の図書を翻閲するのとヒヤカシ客と云ふ、あて書物
屋ハ単一ものゝ如くなれども、その客ニ云ハせると、こゝが鑑賞
であり、購求の設備行為でもあり、知らざるもの客ニ
多少の興味を與へることであり、時ハ彩る溜飲から
あるハ利益を得ることもある。種書籍ハ久しく所
有してゐる者ニ實物を目睹することのない人ニ
共実物を見るだけでも、その人ニハ満足を感せしめ
るであらう。全体書物を嫌ハ人とするものハ、集の書物
を欲しいと目的を定めて捜かすものあれど、去るハツ

きりし以目的がある時、或る書物に觸れて、所謂獲得慾を起すことが割合に多いことである。実に書物の目録だけを見て、一向に獲得慾が起らぬ人が書物屋から買行する目録に就て、注文を為し、目録の実物を見ることが出来ないうちであつて、書物の体裁や版式や装幀などを獲得慾を刺激する[illegible]大切な要件である。

同じ書物でも初版が第一番版か第二番版かあつて異版などがあつて、著者本人の同じ[illegible]さることがあると好書家を刺激する。禁版絶版の書物であると[illegible]一層刺激する。すべて稀覯の書物が好書家の

標原製

[illegible]獲得慾を[illegible]れる[illegible]該因となるが、書物屋が流布した[illegible]柄此の数のことを以て任ずる人びと書籍の主人となる数へられることが時々ある。此点は、図書館の貸出し掛などに比して立優つてゐることも云ひ得ることである。

書物を求める人の種々雑多の別があつて、或る種類の書物に限つて投かす人がある。此等の人は必ずしも珍本を投かすのみならず、或る一類のものを投かす人でも構はぬ人とするが、書物屋が飽く迄注意を掛ける書物の内から取り上げて来る人である。書物屋は平凡のものと思つてゐても其人にとつては大変な価値がある。例へば零本ばかりを投かつて歩く人がある。自分丕義

のある零本が、段々に得た零本で完本となる人が出来、非常の仕合せとなる。譬へば、美しいから買ひ集めるを寄らとして比書物屋がちゃんと伝へた。

書物屋といふ色々の種類があつて新刊の洋書を売る店もある。自分の考へでは最も多く古本（和漢の）の丸を売る店と就て陳べたいのだが、古本の商売が他の商売と異なるのは問屋が無いことである。大概の商売は問屋の問屋があつて、物の仕入れ容易であるが、古本は問屋が無い。新刊書籍の販売は行けば直ちに得られるが、古書となると見る方法では手に入らない。大概書林の共同市が時々あるので、書店はそれで売買の仕入をするやうなもの。譬へば、毎月の市へ相当の値段で特出さる、ものがあるけれども、それは、各古店が持ち寄つて開く仕来りで、やゝ珍らしい古本となると、書店が之を買ひ集めるに相当骨が折れる。やはり義書家からせびり出したり、蔵書家の拂物を子らつて、義書家の死を待つて買ふのがいゝのである。

古本屋といふ商売は利益の細いもので、古本屋は巨大の資産を拵へることは出来ない。其の職業の人の始めるのも少くて、古本屋の他の商売と異つて現金を元手にして物を買へば直ぐ売れるけれども、売つた人が直ぐ来るから、買へば値段を安くさせる或割の値段を附することが出来ない。唯此時を掘り

出しでもあつて、十四の男子と、あが百円を受け、三十円に賣つた。あが三百円の賣んだものを、まんが、また相場の利用りをもつて譯だが、事実堀り出しと云ふことは頗る稀んである。しかし高が有が付度することく駄目をしてある譯のものであつたといふ事業者の言ふことであるが、こんな等は偽らざる告白であつて、決して古来業者は巨利を博し得る商賣であるといふことは確かである。

去かし七五郎は利益の細いが、他の商賣の如く大失敗と様くやうな危險性がないので、少しく文字のあることのある恰好の商賣で、文字の縁があるから上品の商賣で、あり、売主は書物の味や道楽があるので、また細利が儲かるのだ。

自分の所で書物を著作家の墓用だと云ふことがある。著者の墓の石で心ゝをあるが、書物は紙碑で、精神の籠つてゐる墓である。著者の墓は一基で限らない、各著者さんでみるが、此の精神的の墓は一基で寺域にあ述べ始まる。墓と又似ざるもの、十の著述があれば十の墓があると云ひ得る。石の墓は物を云はぬが、此墓は物を云ふ。世界人心を教化を與へる。移動的である。どこの家でもあるさん得る。石の墓は亡びることもあるが、此の墓は廣く流布してゐるから亡びることはない。石の墓は血族に移つて護えるが此墓は天下萬衆に移つて其の感化に流するから書物の先祖の墓の陳列所で店主は多の墓守

のやうなことが、同市内にも四所ある。吉野の古刹を訪ふのに先ず此の墓参に行く様なことが、聖賢の遺蹟の術策を為すのに書物屋ばかりが、書物屋を墓地扱ひするのを共常業者に取せる思ふかも知れぬが、実に尊い営業である。好学の人の散策の折の大切な近び場所は此の書店である。三三五五の客が此のステーションに落合つて、見もする書物を選ぶことをつちのけにして互ひに同志に就て雑談を駄べる時の移るを知らぬことがある。主人が之を傍聴して同志に就ての教育を受けることは、書物屋の待設けの一つでもつて書物屋の政略を開発することが少なくない。書物屋は好学家

やうな者の住宅部のやうなもの、ある二三の有力な書肆では、学者と客を近づけ、随意に交へさせることもあつた。あんなもの、破れんりうの相を具してゐた。自分なる既往を顧みると、此のクラブは日巻にして、午時帰宅当まで元客のセで、日々の人と語ひつゝ、方々から集まるもくさ本を、見る見さきる捨て、優先権を得ん渡りとしたこともある。

今は世界と客を近くやうな古本家の無くなつたが、陳列場を設けて、坐談会を催し、学術を研究するなどが行はれて来た。コンなことも時勢を応用して古本界の奇方を会し、同志の研究の成果を改

橋本製

するやう、図書に関する著述並に書画の蒐集と或る雑誌よ
を原稿を以て出版しやうとする者などもあつて、商利又の
又拘泥しないことは同様に自家を宣伝する法ではあるが
美術（臣）で褒むべきである。併し古本屋の運命は益々これ
偏するて行く訳があつて、追々新刊本を保存しては、古本
営業を新本営業に転換するごとき傾きもある。実
に古本営業を為すものゝ数が餘りに多過ぎるからで
もあらう。何れの国に於てもレア、ブックを珍重するもの
決して多数ある譯のものでない。（日本で所謂）古本と云ふ物はレア、ブ
ックを意味するのでなく、レア、ブックを扱ふ書店は
東京に於て（僅々）三四の指を屈するほどしかないのであるから、
いくら古本屋の運命が縮まつても、レア、ブックを売る

店は（前述）絶無なることはあるまい、勿論普通の古本屋は多く存
するも相違ないが、其等は稀覯本をひさぐ店でなく
僅を数するのみである

○坪内逍遥が久しく不眠症に罹り種々特薬をもつて効
かずにゐたので困つてゐるが、高田半峰も神経衰弱がつのつて
此頃では毎夜催眠剤かくまひ睡眠を得ず、先比保養
のため閑地に於いては一向効なく、十分位談話をつけ
ても頭痛を感ずる位だと云ふを訴へて八田博士に依くる
いふのがある、此れは頭痛を逍遥に報じてやつたら
ら逍遥よりも左の手紙が来た。逍遥は近比逍薬を
廃し先生に専ら閑に摂伏に努力してゐるとし
来るが、実は能く薬剤に頼ることが出来ない。神経性

其後とかく寒さに相催候折柄益御清適
奉賀候小生も平安罷在候
御休心下され度候陳ば過日は御懇書
拝見仕候御地方にては雪多く候由
ど当方にては未だ積雪なく
未だしとて目下の寒気
の方へ被下候おかげ様にて

歓迎とお待ち居り候
同じ病に悩み居りしも其後法(?)大
寒さを厭ひ折柄養生専一
風邪にかかり居り二週間程
を安臥一週ありてそれを
過ぎても同様に平田中す一種
の新式治療法を試み効能少なからず

昨夜は大抵朝まで眠れず四五時間は
[illegible]を得ず慢性病と
[illegible]の病癖[illegible]
加減一[illegible]山岸[illegible]
[illegible]法を[illegible]
[illegible]と相[illegible]
[illegible]又十[illegible]
[illegible]ば[illegible]
[illegible]

自又何[illegible]
[illegible]

十一月二[illegible]

春雄兄

病症などは道楽の如く克く聞病が法を得て長生、自分は二度灸のことく不氏の病がうすく十数年間薬をしたことが無い、但し酒の百薬の長ていこれが無ければ自分は不氏症の四難まで知んまん。

○前夜田中家の九拝の賀会と聞て来た。然は和歌嬰鍔氏と大元氣じあつた。維新の功臣中四翁と仕へて今為藩使在のまゝ伯一人のみの無い。自分は此の賀宴を指て十年前筆を書くまんと大隈侯を懐を起した。大隈侯は八十五歳を一期として云えんとかが、荒しあの疾がうすく五ケ年生き延びまんとら、伯は吐しそうもないであつたらうと、偶々伯の氣魂をもつて譲るまでも無つたらう。

○恐く近年の四難と弱し虹の如き憂四の玉体が

家侯の最後の光輝あらしめんとあらうと。田中伯の晩年は侯と比較しうるものいかの人の晩年の事業とをくらべ維新大帝の遺勲御銅像を九段府に建てる府が維新の大業の一言の無いことを寓し、大帝の大御心をすべ扶するの勢力しとことを表はしてある。其外に伯は家義の珠寶を惜気もなく遺南の霊に寄贈し、其美なる性格を現はしたことは一般の賞賛を博し、尊ては謂はんとき誤解と言へば悪評に累はされた人が、全く別人のせくを持て難さん、帰依者の範囲は大いに拡大さん、常日の金銀立る人は決して宮内省の御縁者や出仕の公卿人のみにあらず、寧ろ此等は少数にして、勉年に拡大さんと帰依者が其の多数を占めた。現在の広方面の

人が最も多数を占めるとの。人間の起節は尤も大切で、折角大勢ある人も起節を保ち得ずに落ぬる前功をめちゃくちゃにする例が少くない。長壽を保つても精神が老と倒れるようでは、唯と形骸のみねじ曲げて節を過ぎるようでは、貧窮の境界に沈淪しかりすることを不幸があつても、寧ろ長壽が却て仇となる。仰ハ起年ますます榮枯の思かまくを振舞得るのハ真に仰の幸と云ハねばならぬ。仰が白九十の齢を迎へた歌に

松もひきやれ十歳をきうもとハ
年ゆつけさのやそ年の初春

出ない様になりますで困らん様に考へてやつて行くと云ふと、窮すれば卽ち通ずるであつて、又た何とか途が開けて行くものでありますで、困つてしまふと云ふと、もう地の中にはいるか、死ぬるかと云ふ事になりまするで、どうしても困らん様に考へて行かなくてはいけない。さうすると誠に心が安らかになつて、何にも頓着は無い。困りさうな時には困らん様な考をする。是が私の是までやつて來た所であつて、友達にも其事をよく申して話しまする。さうすると云ふと、友達が又たそれを守つて、やつて、大いに近來心が裕かになつたと、云ふ人もありまする。何分困つてはいけませんで、困らん様に、困らん様にと云ふ考へをして行かなくては、此の世の中を安く樂しく暮して行くと云ふ事は出來ませんで、困るのは一番のいけない話でありまするから、此事は私は子孫にもよく申して置くつもりでありまするで、是れだけの事をお話をしまする。

昭和七年十一月一日

長壽祝賀會場に於て記念頒布

私の主義

田中光顯

（一）

私は一つの主義がありまする。其の主義は韓退之が伯夷の頌と云ふものに、「舉世之を非とするも力行して惑はず」と云ふことがありまする。それを私は主義にして居りまする。と云ふものは、自分の信ずる所は、世の中の人が總て、六千萬人なら六千萬人の人が皆非である、いけない、と云ひましても自分が信ずる事は必ず之を斷行すると云ふ主義の男でありまする。昔からそれでやつて居りまする。だからして非常に世間から嫌はれ、又憎まれることもありまする。が、それで大いに功を奏する事もあるやうに思つて居りまする。どうもやらうと思ふ事を、人が、それはいけないと云ふと其の方へ傾き、さうでない、かうでないと云ふと又た其の方へ傾くと、云ふ樣な事で、こうごう自分の意志を貫くことが出來なくして濟む人がありまする。それは私は甚だ感服しないので、もう自分が是と思つた事は必ず之を遂行すると云ふ事でなくてはいけないと云ふので、其の今の言葉を私の主義として居りまするで、將來も其のつもりでやる考へで居りまする。が大いに損をする事もございまするで、如何にも頑固な爺いであると云つて、嫌はれる事もありまする。が、是はもう將來枉げないつもりでありますで、それで此世を終るつもりでございまする。

（二）

私が、昔、長州に居りまする時に、高杉晉作と云ふ先生に聞きましたことがございまする。それは「自分の親父が云ふのに、武士と云ふものは困つたと云ふ事を言ふものでない。困つたと云ふ時は卽ち死ぬる時である。平生に、是は困つたもんであると、云ふ樣な事をよく云ふが、それは極くいけない。決して困つたと云ふ事を言ふものではない。又た困る事が無い樣に考へなくちやならぬ。困らん樣に、困らん樣に考へて行かなくてはいけない」と云ふ事を聞きました。それに就てその段々人を死地に陷れて置いて、さうして活路を與へたと云ふ樣な話を聞きましてございまする。から私も其の趣意を守つて、ま、平生どんな事でも、困つたと云ふ事を言はん事にして居りまする。が、ごうかすると、是は困つたと云ふ事を言ふものでありますが、それはもう努めて言はんことにして居りまする。何分困ると云ふと智惠も分別も出ない樣になりますで困らん樣に考へてやつて行くと云ふと、窮すれば卽ち通ずるであつて、又た何とか途が開けて行くものでありますで、困つてしまふと云ふと、もう地の中にはいるか、死ぬるかと云ふ事になりまするで、ごうしても困らん樣に考へて行かなくてはいけない。さうすると誠に心が安らかになつて、何にも頓着は無い。困りさうな時には困らん樣な考をする。是が私の是までやつて來た所であつて、友達にも其事をよく申して話しまする。さうすると云ふと、友達が又たそれを守つて、やつて、大いに近來心が裕がになつたと、云ふ人もありまする。何分困つてはいけませんで、困らん樣に、困らん樣にと云ふ考へをして行かなくては、此の世の中を安く樂しく暮して行くと云ふ事は出來ませんで、困るのは一番のいけない話でありまするから、此事は私は子孫にもよく申して置くつもりでありまするで、是れだけの事をお話をしまする。

昭和七年十一月一日

田中光顯翁九十歳祝賀會

賀詩

文學博士　佐々木信綱

勤王の意氣炎ともえて
佐川の里をのがれ出づ
招賢閣に難波に走り
木高き杉の蔭によりて
　王事に盡くしし青山大人
大政維新かがやく御代に
出でゝ仕ふる幾十年
明治の帝の御稜威のもとに
眞心さゝげ誠效し
　國家に盡くせる青山大人
九十の高き齡をたもち
壯者にまさる健やかさ
蒲原の莊に瀧つ瀨めでゝ
岩淵の莊に富士を仰ぎ
　皇國をおもへる青山大人

昭和七年十一月一日、於東京會館

○近来蓄音機がいろ〳〵役立ち或る場合には式場へ僧を迎へる代りに蓄音機を入れるのを式場へ持ち来り、その音響をもつて代へるやうなことが行はれ出した。蓄音の音いかに明らかなる者が情を籠めて読むとは言へど、思考の僧が読経する(経)かん優つてゐることゝ思へば。

○北海道上陸の移民及び移住の新産業の開発をやつてゐるが、自分らの新産業の開発(特産)を大なる事業とし、よい三條や燕市びいきのフオルリやナイフ輸出されも油断からんとする。東南洋の第一人者

○日本のマッチの第一の製造家に清水誠と云ふ新

我が國に於てのマッチの歴史は清水誠氏の鋭い着眼と半世の苦闘に依つて表はされて居る。頃は明治三年夏の或る日のことであつた加賀の國から遙々と横濱へやつて來た一人の若侍は道ですれ違つた西洋人の手の中にある小さい箱の魔術に驚かされた。西洋人は箱から出した一本の黄色い玉のついた細い棒の先から自分が得るのに骨の折れる火を一瞬に作り出した。若侍はそれを見てじいつと考へたのであつた。此の若侍こそ廿五才の清水誠氏であつた。清水氏は斯んな便利なものを日本でも製造出來る樣にしようと早付木（マッチのこと）製造法を思ひ立ち外國へ渡るべく決心をして遂に傳手を求めてフランスに渡りマッチの製造方法を會得して明治八年歸朝したそして同年四月芝三田四國町吉井友實氏邸内にマッチ工場を設けて日本人自らのマッチを製造し初めたのであつた。其の以前明治三年（一八六九年）横濱在住のブラウンと云ふ西洋人が野毛山にマッチ工場を設けて製造して販賣したことがあるけれども不評の爲遂に工場を閉寒するの憂目を見たのであつた。

明治九年時の内務卿大久保利通閣下の後援を得て、本所の柳原に清水誠氏はマッチ工場新燧社を設け四年後の明治十三年には本邦マッチ業大いに振ひ外國マッチの輸入を完全に防止して其の後は支那南洋ロシア方面にまで輸出する今日の隆盛を見るに至つたのである文明の始めの火を獲ることから燐

燧社を創立した人びとは、北人が苦心身とえへた加賀まい共蓋がある。北人がマッチ製造を思ひ立つた動機に就ては廣告の如く出てゐる

寸の發明―黄燐から赤燐―安全マッチへの今日、日常生活の必需品として一般化されたところの燐寸が又一つの新たらしい方面、即ち廣告の方面に進路を見出したと云ふことは大いに偉とすべきことではないか。（以下次號）

佐伯
井口 **兩博士御推奬**

大日本聯合婦人會
生活改善同盟會 **御指定品**

近來保健衞生思想の進歩に伴ひまして食物の滋養分を多く攝ることがいろ〳〵と研究されてまいりましたが、それは何んとしても**毎日の主食物である米の營養價値**を多く得る方法の研究が一番大切であります、主食物の營養價を多く攝りさへすれば、副食物などは寧ろ第二第三であります。

米の營養分の非常に多いことは誰れも知る處ですが、それが**炊き方に**依つて折角の營養價値を失ふことに氣附かれない方が多い樣であります、この新案特許の**極東蒸竈**で炊きますと、最も大切な「**おねば**」が少しも溢れませんから、營養百パーセントで而かも天然本來の風味を失はず、**眞に美味しい御飯が出來て**、瓦斯や「コンロ」などで炊いたものとは全く比較になりません、其の上左記の通り多くの特長が御座います。

特長

(1) 御飯が煮へ上れば直に火の消へる裝置になつて居りますから**燃料が非常に經濟に上ります**、即ち普通二、三升炊きなれば、**木炭一俵**で**二ケ月位は充分**であります、木炭は成るべく安價の軟質のものほどよく炊けます。

(2) 釜全體を圍み包んで居りますので煙突もいらず、**火の元絶對安全で**且つ**至極衞生的**でありますから、警察でも推奬されて居ります。

(3) 如何なる**不馴の方**がお炊きになつても、水加減さへ少し注意すれば**炊き損じ**は絶對になく、また**御飯をこがす**樣な心配は少しもありません。

(4) 胚芽米や半搗米殊に玄米などは大分炊きにくいものですが、極東竈で炊けば**白米同樣に美味しく完全**に出來ることは、他の如何なる炊き方も及びません。

(5) この竈で煮炊きして**出來上ります時間は**、御飯でもお菜でも、瓦斯と**全く同樣**であります。

(6) この竈で**野菜や魚など**を煮ますと、非常に美味しく出來るばかりでなく、小魚などは**骨ごといただける**樣に軟らかになります。

(7) 冬期は炊いた御飯を釜から移さず其の儘竈の中に入れて置けば、數時間は**全く炊きたての樣**に溫かくいただけます。

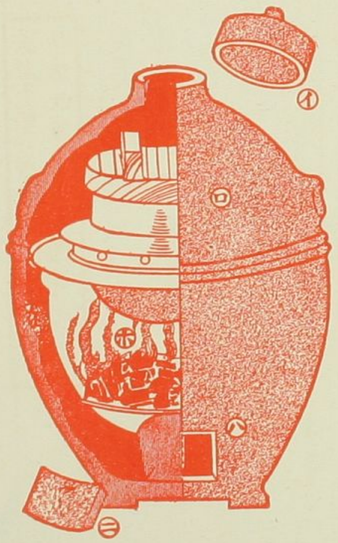
以上の樣に特長がありますに、**體裁は優美而かも堅牢**で容易にこわれる心配がありませんから、お臺所の主要な用具としてこんなに**理想的な調法**のものはありません、何率一日も早く御試しのほどを願ひ上ります。

使用法

一、㋭ノ中ヘ火種ヲ少シ入レ其上ニ炭ヲ釜ノ底ニツカヌ程度ニ入レ釜ヲ載セ㋺ノ蓋ヲスルコト

二、約十二三分デ㋺ノ蓋ノ風口ヨリ湯氣ガアガレバ㋑ノ小蓋ト㋺ノ底蓋トヲシテ約十分程經レバ完全ニ御飯ガ蒸レマス。

新案特許
一一三五
五一一三五
號



燃料の經濟だけでも左表の通り非常な御德用になります

二三ヶ月デ本器ノ代金ハ出マス

燃料對照

（三升ノ御飯炊）

燃料種類	消費代金	對照表	比較率
木炭（極東竈）	八厘		1
石油	二錢五厘		3倍强
瓦斯	四錢五厘		5倍强
薪	五錢弱		6倍弱
電熱	五錢强		6倍强
木炭（在來コンロ）	五錢五厘		7倍弱

美味無上、保健最良
火の元絶對安全、堅
牢無比、炊き方簡單
燃料經濟、然かも價
格低廉なる極東蒸竈
を御推奨致します

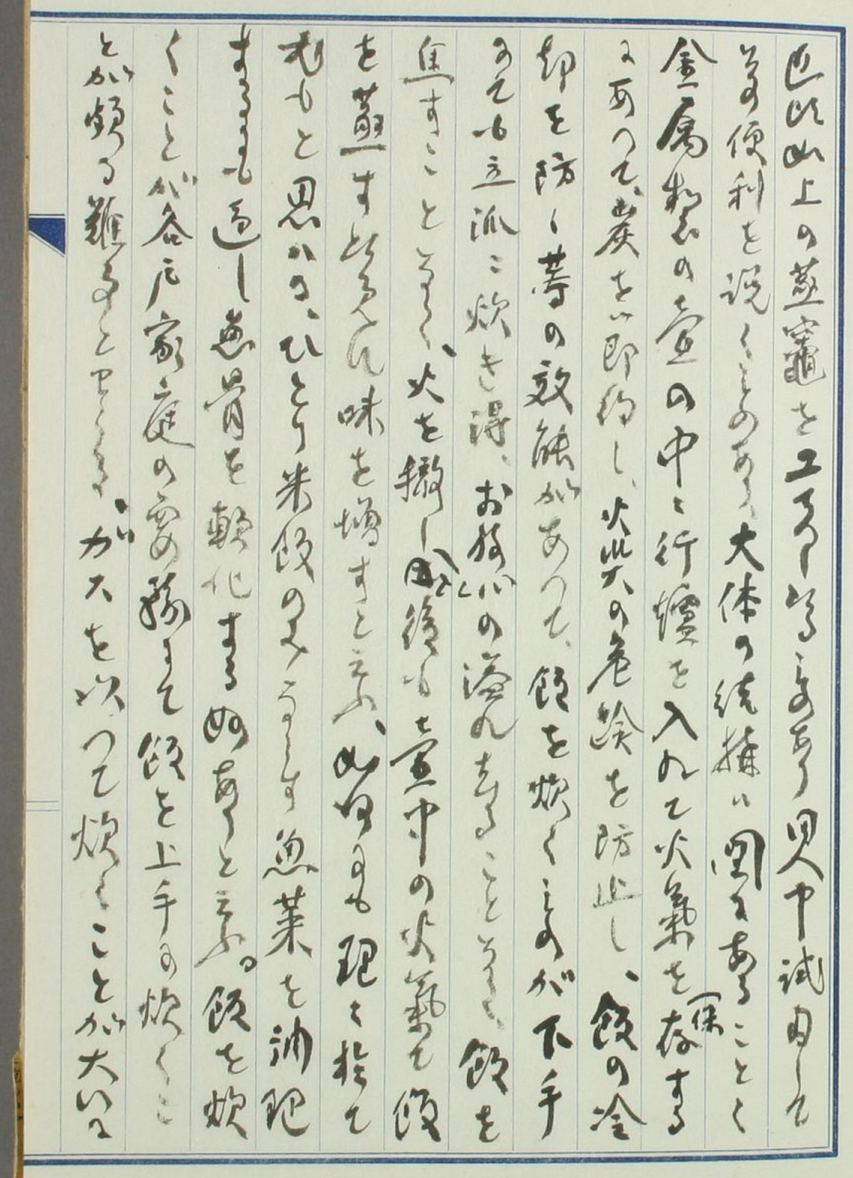
極東蒸竈ノ定價

五合炊　參圓
一升炊　四圓
二升炊　四圓五拾錢
三升炊　五圓
四升炊　六圓
五升炊　七圓

其他大小種々あります。

特約店

榛原製



行はれもするが、味を害するゴムなど、味を失ふ味する家うち
作けられもするが、これはよくゴムの鉄瓶を補ふものである。
支那料理などに成る数する竈でうとゆく、竈の会記
化をうるべきこと。

○ゆうの猪書拓殖味社の産業会社と拓殖会社と共に十人許り会せ、安田氏長次郎氏
教育会社と共に共に十人許り会せ、安田氏長次郎氏
藪崎一橋井清吉氏川瀬一馬氏渡会氏三人共の久兵衛
るとも出席した拓殖味社の庭可渡氏が紙問掛りとして
の役割で渡る釣る出されていろく話る。商部さんが
動機で考物をうとかの例を挙げて自分の八幡まで
考えることがるこのつと。法庭のもよ幼のもと
書物を拵へるとが、動機とゆ点にハウキリしろう

横原製

つとの自分などは七八年位の時間祖母の隠居と毎の拓
る出うけて、名所図会の絵を展観し、曾祖母の設の
を聴たるが、江戸名所図会や日本橋の要衝の図
京都名所図会などの社図殿の図などを見て喜んだ
といふ話がある。浪花名所図会が揃てあつた
のは、こんを展観すると無とて、自分の書拓殖味を
自分コンサとかも萌芽を発した。あるいつは殖の
二年位郷里に学校が開かれたとき、老家からいろくの
漢籍と学問の教へ比其市の友倍と八大家文が特製
の立派な本であつて、自分は之を学問の材料と
子供心に思つた。書拓の会は確かなあつたと自覚
するまでい続つて、そして後の程々の淡として

つた。是は幼少の時感じた興味いつまでも深くみる一般
として大坂の鹿田で義井仲の時代一束を喜んで読
んだ記憶した。仲の詩は幼年時代愛誦の詩であつた。
鹿田で得た移書は当時のあらゆる詩人の詩集を得た事
書であつた。九州のハテに迄も深を訪ねたことがある
此行をと極つて切つたことをもつて後つた。琳瑞園の日表
して自風任を手に入れたことや極京の移りを見て堀り出
したことや、琳瑞園に就て行き思い出を語つた。あまい出
校へる之の四時から書物あさりと始めその後九州の筑州の村
幸を忘れず語あれたことを語り村幸一家もまゝ始めの男に書
物の使が日に伝つて異つたことを語つた。大雪災と金印
の蒐集を見つた所感をと問れ、義と義し書物の記

複原製

これ何等考えなく偶然もそうつた。貧の中の家が全滅
した公死などのことから、義と義を教えられた他を思ひ出した
どいろいろとなる。支四人兵衛の後を淡々見ひく塙本が
ら仲山ばかりを主とした。此流の初年まで塙
本は重大せられそうした。何しても庶が忙かしく、住本の
標準にかけても書きはけて遺言高く倍ひたらと思つた。義
父がやうまいいそ、そつと手のヒラに書名をかきつけて遺
を入つてから義を控へたやうの仕末であつたと後つた。榎
井は国吉家と主仕してみる身分なから、貧をも此時
清河国就四ると皇室と献上された二程の宋版し
就て質すもあつた。榎井の蒐集する二程は院に国吉
家で田はつてきておるが未だ公表する機会とまつた

ぬぬと云ふてゐた。劉の七三藪文物七三汎の巻釘さん
御寶の印もあるなどと云ふて、宋版を
進物などと市場へ出さんことが始めて大衆まちんかも
すべきことは宋版の書いことが始めて大衆まちんかも
あらう。其実物の物粗そうの飽り細かん評しさへ
方がよかろうなどと自分いと云ふた。然るに誰かがあるう
く稀覯の書を集めれかと云ふの就ての岩崎を第一に挙く
べきは勿論だが、自分の田中吉山伯を送ってはいかうと云ふて、
根津に伯爵に古宮託、内閣総理大臣を始めて、ちんの住地の人で好書癖の人は他に比較かるい
と云ふた。後の発候と云ふた、二時間を参らん敬分ちた、十一
月六の記

あの自分の談話は書き琳琅閣に紙とあった。西村豊文の偽
心の良井の紙紙金泥経が西村さん井上侯爵の手を経て
北海道の自分の琳琅閣に紙と井上の茶の同じ物を見た時七月と云
のと思ふ三回に侯を出かけて井上のと同物が千分の一位と
云ふて笑ふた話。冬三人が金物を見ると高価と吹きか
け自分の云ふた侯らも二三倍も高くし、貴人が買ひ
かうとするのを侯うあい方、本氣で考へて後に泡
沫の為めと云ふた或る書籍を自分に勧へたこと、蕉
堂の原本書数冊を朝吹英二に早大図書館へ寄
贈の云味で買ふたを以て自分の勧めるやうな
感じで義理を済ましたこと、琳琅閣の主人が眼
一分なるのに、書物も骨董一つも赤南の経験も

有ることもつれの、前者の説の勝ち敗、後者の説の
所田石あるとふ石が多くあるが、流石に其恩を忘れず
殺す時なれの墨絵を正流に表もしを永く家
の保めべく遺命したこと、琳瑞寺さんに拝面の法改
が有ること、自分ともいいつもそこの他の未来を回者
法の戦争が例ひ有ること。島田著根とふ者俗
ちとる毎に出遇つた。今早稲田に移して御国
寶里流の礼記の義疏が清正公殿と猫に人を
る様一般の海と四十先頃に買ハセたのも此俗
びあること。梅宿の遺印二顆を秘蔵してみたが
世変に遇て文人が書れ(印)しくと競争してあ
なが、後を以て美らあるとあって、別頭自分に

標原制

賜ったる。多分礼儀教典を市場で買ふて来い便び
義れ一稲田の改造(印)寄付を拝き、さて之が店頭に
いつまでもあって、稲田の制度を保存すると云ふのに
成と利益を打算の為に買き代金の仕拂人何年
に渡つても苦しくうないとこのに早稲田に買ハセた。
これが彼れの顔を立てたのに、自分を大いに感とした
ことを梅宿の卵と自分に思て比べ以ひあら
う。梅宿の心つた所金沢の底に三宅家什物
の海を巣山の木俗を北底から買う
ものに今も変
ても公的指動くことの誰れが
まゆさず自分の入手を義たさい日巻の(印)砂を

ふべきいとあらう、ちどが自分の[illegible]遠慮深ひあつて

つと。

○松の木は実を防くことい実が難るで秋の今頃まで元氣のよかつと枝が一時の黄心んで枯死を現す、今ハ丁度植木屋が毎の来て剪定前の松ハツイ立る前と手入をしと時ちん葉ハ黄少てあとうつとの心忍ち枯死を現へして来た。松ハ枝を切んが再び生くるへしまのとかく姿勢を保つ為めの一枝が枯んと全く困るどこの庭園でもこんな困つてゐるが、植木屋と笑はれ東京市でも目的困つて枝のがいろ〳〵研究して枯の根元迄うき幹え葉を捲いて元て效験がありつとと考へ、冬枯くなると蛾が枯す実の生する代りに葉

横原制

田上進報

を迄迄広のて、春二陵を待つて共葉を元去ることが出来の駆除の一法とす、つまり毛虫の性に従ひ法で、取るもるべきい細事こんなことで無んハ防き得るい譯だ、

○教育中亀井昭陽の蒙史九冊を獲た、余前年零本一冊を嫌めて家に蔵す、今獲たるの神武より業を始し五十六代文徳帝に到る業を綴つこん亦零本なるや否やを知らず、北書に真と稱、觀のるも也、頼山陽の昭陽を訪しの北書を示さる山陽曰く君の業多多とするも恐くは後世に傳ずと果して其言の如く、山陽の史ハ天下に流布まるも北史を知るものなし、蓋し昭陽の古文を以つて筆心し後世難きが故也、然んとも日本歴史の一名れ

うを失のず、北方本俗三十四也

○予蘭を愛し時々賞でて年を経るを絶ひ漸ゆく枯死し今僅に数茎を存するのみ偶々星石宋伯書する所の蘭の半切一幅を齎し来るあり乃ち賞して盆栽とす、日から手紙北蘭年を経るも枯死せざるを、北方根を露つし美長く花に風情あり淡彩を著す予北人の書の直氣ありきを愛し往日雲根を化し一幅を賜ふ和答して掲げず不便也、亦賞ふ所也　十一月七日記

○予往年燕京に游ぶの日滞在僅に五日、日々歓光に つとめ朝出て暮に入り坐に北閣元の書曰く宮殿

曰く紫禁城南海北海中海の宮殿、曰く萬寿山、曰く天壇、曰く城壁、曰く鼓楼等、駭目の者皆其の規模の大なるを称す、燕京も亦たんとも支那の一都会に過ぎざるのみ。燕京著名の物如何ぞ一覧を経ざるべからざるに、但北堂の書籍、未だ四庫全書を見ず、頗くへ見て依つて一覧することを得人と、敢て宜許を得ず一見を得ざるこんも偉大なるもの（なり、既に多くの偉大のものを見、之んを見ざるべき書物の数味なる手の殊に貴）

城とし為る所也、勿論四庫の書籍の部分的と雖と見なり、其の全本の体裁其の精神其の容貌皆之んを知る。但北四庫全書全部を通覧一所に観望せしことなく、之んを見さんが雄大の感な

しこん寺が志きりる所以也、偶と北京の全書一部北京日に在り、其宮殿邪中其を倣りる其の義所となりあり、越んとも人の主入るを禁じあり。幸に特許を得て、其宮殿に入る、宮殿は日本の[illegible]庫本の如大寺院の如き宏壮のものなり、言を尤びんも比すべきものなり、まんらう、まんらう、八、天井迄かくまむ積まんも、悔い究十間なる及び長んも、案の宮の八畳なるに、宮殿の規模の大なる伝るるうん、日差し日本式の書庫まもも納めれらば、恐らく一庫まもへ狭きを感ずべし、他の大なるものを準日見ず目るその、左まむ大を見くさらしば、恐らく一所に集めず日此書を見ることとい、今後

橋原製

即ち得るまじ、日本の地と於ては別して此理ある事、遊東日観光の[illegible]（新英中英）す可らざるの一なり。

○昔年漢土と云いんとする徳川家達公八本人年七田徳の艶でありるのん旅行孤寂を納まるるのまん日院の法国体も国のものなる。誰んか辞位の勧先をしたるどうかと云ふと、あの人の一部人の勧先をしたと云ふ、右と云ふ左と云ふ性質が、学旅院の妻子を指右する時も清も法国体の注文を答れることがうへと云いんもある。あの地位の人行う拝移演説ひやうときうん完前度用が並り出つう、皮肉を云ふことが得意と見くるが、時まん聴者をへうく思いまることがあ

て人品を損ふことがある。

○年が年がお面さきの日」まであるが例年もし
ばしばやくいろ、金も儲と聞あり、先て行かんと云立つ、
面の市へ深川の仲丸をひきあんど浅草をと思ひんで
十軒位家を出づ、浅草の面の市へ浅草広小路の
くるまあり、曾て一度見しことあるに四年前の四月
なれど、大変繁昌の地現ないなく異なりても、およそ
の方面へ立ちんどなるべく、先ず越手
ちどを踏まるる人の多く路を出りて、七八町も往
まるて行くと、先づ浅草のつ前と達て、次の
辻市の前なる人出多く、毒魔ちどの出て踏ふもの
かくなり、おのしきこと思ひ、先づ入つて入んと、あち

ここちらをおきえんとて、分の花術の中央と菊花を
植えて表面の観覧と偽しつてあり、そんをみるとき
左右の婦婦をんとて、名を印る家のあんど、芸しの
感観のなく、何をかうつる風のしるべ、ちちけちき
を絞るるる、八芳の歳とおれれり、芸しの婦婦の
不得るこしこウウエンドオるる婦妓が石美んで自分
らを居るるるか居りたかんそんの様もんて
こしこウウ井ンドーるるん或の金屏風を立て或は
表の表の間と廊陽のことき装飾をなす花自
瓶をどを置く家るる多く、もとの風とのちくかう
なる。芸しの婦婦の減るるるの出を待さんず、稽んて出ん
が大根の婦婦ハテテカケ姿で出なるるからの出を

自由となつて、端午の羽織を着るくらいの分別は出来ないまん金山も絶えて、髪を時勢風の尺長のカウガイを挿し、長羽織の異様の姿を無つくろう流れ中の町に居くらし手巻屋日の山の麓を通ると、こと考へとかへらねばと、雲がの頃の家を訪ねるよりも重つも楽しうあるる。今を志門の変化して、こゝに志つくらんと思ふ。例の福地桜痴翁の書し給ふ絵入新聞の社員が震災を焼け出され紙会のとも図数を保存してあるを見て、さてはこゝと志つくめと僅うする事を得たり。若ち一日泥酔の地も荒十四年見を入

複原製

れることとなる。八月三日愛宕の白雲一楼のすゝめを受けもたれと一数なきことを得るの。芳原の西つを出んへ五十年ぶりに芸者を見ぬ。今の地形変化堤らしきあの足あらず、旅逆とまもんで大家の作る所と行けば端なく鹿鳴社と別る。此岳の絵図が実の去しく、社の変庭の社の内ふと対面を設張ふ人のなるなく江戸情緒のことを発作味ひ得るようと思はれ此が、多衆と押されて○伊達の博ハすゝ多数の婦人の庭園を四脱して偉うる街頭と出でなり。（十一月八日）

○富山房より近刊大言海第一冊（あらまきこゝろ）ハ五十頁の巨書を寄せ、此書は大きな印刷会社が抜群力を注ぎ給ふ。真に日本辞典（言海）の巨

逋漏なからし
両語梵語をも
を殫し悉く施
ゐんや
り然れども余
は獨り此「言
邦の言辭を學
非ざるべきな
に「言海」の
大槻君の自跋
畢せられたる
人をして酸鼻
後學を激勵す
著者と同じく
しんことを冀
士父君の誠命
んを
西村君の董督
究明を我文學
し諸君の清聽
博　文
年ノ頃文部省
村書ノ文法ト
名トノ一定、

本邦文學上空前之一大著ト稱センモ敢テ過頌ナラザルベシト信ジ申候貴家ト小生之家トハ三世締交ヲ重ネ來リ今日貴兄ニシテ本邦ノ「ジョンソン、リットレー」タルノ名譽ヲ博セラレタル事小生ニ在テハ啻ニ公益ノ爲ノミナラズ私情ノ上ニ於テモ欣躍之ヲ佻バザルヲ得ザル事ニ御座候依テ聊所感ヲ述ベテ謝意ヲ表シ候謹具

菊池大麓

右ノ外ニ祝文詩歌ノ賀章等數多アレド略ス諸新聞紙モ亦皆其著作發刊ノ事ヲ稱評ス其一二ヲ左ニ掲グ

「日本」新聞六月廿八日ノ社説ノ摘要

〇民間の偉功に報酬なき乎

凡そ士君子の偉業を企つる者は豈に初より其の報酬を世に要むるあらんや、奮ひて人の爲し難きを爲し百難を排して以て其の志を成す者は固より小利小名を一時に博せんと欲するにはあらざるなり。然りと雖も、社會は其功績に對して無感覺に經過すべからず、其人固より報を當世の社會に望まずと雖ども、當世の社會之に報酬する所なければ、是れ其の社會は善惡の知覺なきものなり道義の感想なきものなり。大著述大出版を爲す者の如きは今日に在りて營利心の能く促す所にあらず、必ずや其の人の鋭意勵行以て公義に赴くありて而る後に始めて其の功を成す、是れ豈に今世に得易きの事ならんや、（中略）

大槻文彦氏の言海に於けるは猶ほ褒揚すべきものあり言海は邦語字典なり、吾人が日常用ゆる所の語料數萬個を擧げて一々之に解説を加へ、且つ其の種類を分ちて又た語法を示し、之れを一大冊に網羅し盡したるは明治の時するの人あらん、余輩は唯だ我文學界の二大缺漏が、此の二大新著によりて幾分か充されたるを喜ぶのみ、何ぞ又他を云ふの遑あらんや、

二束三文の小册子續々梓に上り、絕えて大著の出でざる今日、幾んど時を同うして此の兩書の出版されたるは、余輩我文學界の爲に之れを賀し、又現在未來幾十百萬の讀者に代りて深く編者の勞を謝せずんばあらざるなり、頃日「言海」の成るや、編者の友人相謀りて一大祝宴を張り、廣く文學の士を會して、編者の苦辛を公告せり、余輩は之れを以て洵に善き企となし、手を拍つて文學の爲めに喜べり、冀くは斯る催しの我文學界の習慣となり、良著の出る每に盛會を開き、一には著者の勞を慰め、一には其の名譽を顯彰せんことを、これ余輩が文學奬勵の一手段として冀望に耐へざる所、殊に言海、社會事業の二書に就て言ふにあらざるなり、

然りと雖も上陳の如き計劃は、唯だ一時著者を滿足せしむるの手段に過ぎず、若し夫れ其の名譽を廣く且つ永遠に表彰せんとせば、別に手段なき能はず、余輩は賞勳の制度完備せる今日獨り文學に於てこれ無きは、我國の一大缺點なりと信ずるなり、固より文學の士は名の爲に文を作るものにあらず、譽を欲して筆を役するものにあらず、之れが爲殊に名譽表彰の手段を設くるが如きは、識見ある文學者の却つて欲せざる所ならん、然れども之を表彰するは實に國家の義務なり、國家豈に之を怠る可けんや、

（以下略）

辭書は、此度著者大槻文彦の前に言海を著したる以
来行はれたるは明治廿四年の寫本と稱す。彼人は多少の語
の辭典ありしが、そは雅言古語を網羅し、活用を表して及
ぶ文彦三十年間精力の結晶也。世間功徳を賞して居るは
實書の上梓出るこそ多けれ、志ある杜撰の寫本は備へ
人を誤るが、雅言實書出たる優る。実に此けの出来
の利害を観察し、学者が名巻をかけての著のすすま
きのし文彦編纂の苦心は巻頭掲するの記
に略々記されたるを得べし。此種の編纂は全く骨を折つ
り血を吐いたるの事業なり。日本の古来幾多の字書
なきを惜しむべきなり。而して洋の大辞典に比肩を敢て
逃ることのみは、此書を以つて始めとすべし（十月　いか池）

榛原製

◇初版「言海」完成祝賀會席上に於ける祝辭と當時の新聞批評◇

宮內大臣ヨリ編者ヘノ御達

日本辭書 言海 四部

右今般編輯ノ趣ヲ以テ
天皇陛下
皇太后陛下
皇后陛下
皇太子殿下ヘ獻上被致候ニ付夫々
御前ヘ差上候右ハ斯道ニ裨益不少善良ノ辭書ニシテ精勵編輯ノ段御滿足ニ被思召候此段申入候也

明治二十四年七月二十三日
宮內大臣子爵土方久元

本書發刊ニ及ビテ編者ノ舊主舊仙臺藩知事伊達伯編者ニ左ノ一書幷ニ伊達氏定紋服一襲ヲ贈ラル

言海被相贈辱存候右は故磐翁の家學を繼ぎ百折不撓十七年間精神を費し一大辭書を編輯被致候儀實に近世絕無僅有の著述と深く感入候依て微意を表し目錄之通進入致候也

明治廿四年五月　伊達宗基

同年六月廿三日高崎正風富田鐵之助增田繁幸君其他仙臺出身ノ士十餘名發起者トナリテ東京芝公園紅葉館ニ於テ一大祝宴ヲ張リテ編者ガ多年ノ勞ヲ慰セラル參會ノ貴賓ハ伊藤伯大木伯勝伯山田伯土方子榎本子谷子加藤大學總長西村宮中顧問官杉皇太后宮大夫辻文部次官花房宮內次官重野文學博士黑川文學博士菊池理學博士細川潤二郎木村正辭津田眞道濱尾新矢野文雄高田早苗關直彥陸實君等三十人許ナリ外伊達侯伊達伯寺島伯副島伯品川子福澤諭吉福羽美靜箕作麟祥外山正一小中村清矩川田剛伊藤圭介末松謙澄君等數十名招待アリタレド病氣旅行等ニテ來會無カリシヲ遺憾ナリトス席上富田鐵之助君先ヅ開宴招待ノ趣旨ヲ述ベ次ニ伊藤伯ノ祝詞アリ左ノ如シ

諸君余は素より淺學寡聞敢て諸君の淸聽を汚すの當らざるを知ると雖ども高崎君の懇切要望せらるゝと余が衷心に大槻君の「言海」の大成を欽喜するの餘り叨りに朝野文學の大家に對し玆に一言せんとするに至れり諸君余が不似を咎められざれば幸甚

抑々我國語は新古雅俗の多きが上に外國語梵語の移入せるものも亦尠からず殊に二十餘年來文明諸國と駢進するの方針を取れる以來制度文物の大より風俗習致の小に至るまで輸入せざるはなく隨て日に月に新意義を有せる言辭文字を增し其の言と文との懸隔をして一致ならしむるの必要を感ぜざるや極めて切なりと雖ども未だ著しく效績を文藻上に顯はすに至らざるは最も遺憾とする所なり

凡そ社會は其の進步と共に事物を增し隨て言辭文字を滋すものなり我國の如き驅馬に鞭を加ふる勢を以て長足の進步を爲すものに在ては猝かに複雜に趨かざらんと欲するも得べからざるなり若今にして一大指南車を與へざれば則ち言文倶に紛亂し遂に名狀すべからざる變體と成果てんことを憂ふるは啻に文學學のみに止まらざるなり

邦人若歐文を學ばんと欲せば則ち先づ文典に通じ漸々歲月を積み其の識得する所の語辭を增すに隨ひて言文を巧にし遂に普通より進で專門に入るも未だ難事とせず然るに外人の邦語を學ぶに當りてや定準とすべき文典の具備するなきを以て汎く書を讀むの階梯なく止むを得ず勉めて他人に接し苦學多年僅に日常の語に通ずるを得るも其の謬訛の甚しき吾人をして噴飯せしむるものあり會々外人の日本に文典なしと唱ふる者あるは其の妄や辯するを待たずと雖ども畢竟彼をして此の嘆聲を發せしむるものは抑々邦人の罪にして我文學上の一大缺典に非ずや

今大槻君が十餘年の辛苦に成れる「言海」を繙閱するに先づ歐洲の文法に則りて我文典を畫定し因て以て根據となす假令專科の言語を彙集せざるも日常吾人の用ゐるものは其の新字譯語に論なく粗々之を收めて遺漏なからしめ其の數無量四萬に垂んとす近古雅俗及外國語梵語をも網羅し假字訓解幷に精確にして索引其の方を瞭し悉く施すに名動形副等の品字を以てせり其の亂麻を斷ち迷雲を排せるの偉功に至りては豈余の贊するを須ゐんや

余は比年好辭書の世に公にせらるゝを喜べり然れども余が前來敍述したる缺點に應ずるに足るものは獨り此「言海」を推さざるを得ざるなり想ふに將來本邦の言辭を學び文詞を味ふ者の其の恩澤を被るや鮮少に非ざるべきなり

今日辭書を編著するの至難なるは西村君既に「言海」の卷首に論ぜり又斯の業に從ふの多艱なるは大槻君の自跋に於て之を知るを得ん君が自家の事として筆せられたる伉儷を失ひ愛子を先だたせたる條の如きは人をして酸鼻に堪ざらしめ其言や躍々として神あり頗る後學を激勵するに足るの好文字たらずんばあらず余も亦著者と同じく本著を根據とし他日一層完全なる辭書の出でんことを冀ふ且著者年齒尚壯前途多望なり願くは終生王父君の誡命を服膺し斯文の爲に益々其力を致す所あらんを

余は恭て著者が勤勉此の大業を成したると西村君の董督其宜きを得たるを謝し會衆諸君と倶に一大光明を我文學に得たるを賀する爲めに聊茲に蕪辭を述べて諸君の淸聽を煩すこと爾り

伯爵　伊藤博文

次ニ西村茂樹君ノ演說ノ大意ハ「余明治六七年ノ頃文部省ノ編輯局ニ入レリ當時企テタル事業六アリ教科書ノ文法ト假名遣トノ一定、學術ノ語ト外國ノ地名ト人名トノ一定、眞成ノ日本歷史、日本辭書、故事類苑、大學ノ教科書ヲ日本文ニテ作ルコト然ルニ其六業中ニテ成就シタルハ此ノ言海アルノミ云々編者ガ文部省在勤中數十年間ノ勉强苦心ハ言フヲ待タズサレド後ノ自力ノ再訂刊行數年ノ苦慮ハ更ニ一層ノ甚シキモノナランコト自跋ニ於テ知ラル編者ノ耐忍成功余ガ感喜スル所ナリ云々」次ニ加藤弘之君ガ演說ノ大要ハ「編者ガ自跋ニ其王父君ガ誡語ナリトテ凡ソ事業ハ妄ニ興スコトアルベカラズ思ヒ定メテ興スコトアラバ遂ゲズバ已マジノ精神ナカルベカラズト擧ゲラレタル此言ヤ異常ナル誡語トモ思ハレザレド扨此意ヲ守リテ遂ゲタル者ハト問ハヾ千萬人ニ一人ヲ得難カラン此ノ浮薄射利ノ著作ノミ山ノ如クナル世ニ本書ノ如キ至要ニシテ至難ナル著作ヲ見ルコト實ニ歎賞スベキナリ云々」次ニ辻新次君祝詞ヲ讀ミテ賀意ヲ表セラル又勝安房君ノ和歌アリ

浮雲の浮きてたゞよふ世の中に家の風をも吹き起しけり

內務大臣品川子編者ニ言テ曰ク君ノ著作名流ノ稱讃多シ余復タ言ハズ唯一言謝スル所ハ余ハ外人ニ遇フ每ニ日本ニ文典辭書ナシト言ハレテ常ニ憤懣ニ堪ヘザリキ然ルニ君ガ異常ノ著作出デテ始メテ余ガ憤ヲ解ケリ是レ先ヅ謝ヲ思フ所ナリト福澤諭吉君亦一日其門下某ニ語テ曰ク文武何ゾ軒輊アランヤ然ルニ文勳ハ常ニ武勳ニ厭セラル言海編輯十七年間ノ辛勤耐忍ノ功ハ彼ノ熊本籠城ナドニモ勝ルコト數等ナリト

福澤翁亦左ノ祝詞アリ

大槻磐水先生の誡語その子孫を輝かす

大槻文彥君編輯の日本辭書言海成る全部一千一百十頁語の數三萬九千一百三古來未曾有大部の辭書のみならず古今我國の辭書は所謂節用字引の類にしていろはの頭文字を見當に語を採る者なれども書中その語を排列するにいろはの順に由らずして字數の多少に從ふか又は言語天文地理人品等漠然たる部門を分つのみなるが故に索引甚だ便ならず俗に云ふ地獄繰の勢に苦しみたるものが今この言海には假名の順に從て語を幷べ三萬九千の語には三萬九千の順序を成し一語として其順に由らざるはなし日本開闢以來始めて辭書の體裁を備へたるものにして言海以前日本に辭書なしと言海始めて世に出て始めて眞成の辭書を見ると云ふも可なり蓋し十有七年著者辛苦の成績我文林の偉勳として爭ふ者なかる可し卷末のおくがきに記しある君の王父磐水先生の誡語に事業は漫に興す可らず思ひ定めて興すことあらば必遂を期する精神云々の遺訓こそ實に君をして此辛苦に堪へ此偉勳を成さしめたるものならん磐水先生は我洋學創業の先人として吾々後學の常に景慕する所又君の尊嚴磐溪先生は當時の碩儒にして竊に西洋の文明を悅ばれ天下その名を知らざる者なし此父祖にして此孫子あり逝者若し靈あらば地下に莞爾として君の成功を賞せらるゝことなるべし洋學の後進生諭吉に於ては轉た懷舊の情に堪へざるものあり謹んで言海の成るを祝す

明治廿四年六月廿三日　福澤諭吉

又文科大學長外山君理科大學長菊池君左ノ賀狀アリ

拜啓陳ハ御編輯之日本辭書言海今般彌以御大成相成候段貴兄之御爲メ而已ナラズ又國家之爲メニモ大慶之至ニ奉存候從前日本辭書トモイフベキモノハ皆無共可申有樣ニ御座候處御骨折ニ而此闕典ノ補ハル、ニ至リタルハ御名譽之儀ト存候何レノ國ニ於而モ初而辭書ヲ著シタル者之困難ハ實ニ一方ナラザル者ニ御座候由承居候貴兄之御遭遇ニナリタル御困難ノ程ハ實ニ奉察候乍去世ニ辭書程人ノ必要ヲ感ジ候書ハ無之故貴兄之御困難ニ因テ人ノ益スル事ハ又莫大之事ニ可有之小生友人中ニモ日日言海ヲ使用シテ其便利ナル事ヲ稱ヘ居候者不尠殊ニ貴兄之爲メニ可賀ハ今日何事モ速成ヲ旨ト致候時ニ際シテ言海ハ十七年間之御刻苦ニ依テ大成ニ至リタリト云フノ一事ニ御座候實ニ明治ノ一大事業トモイフベキ者ナリ先ハ祝意ヲ表シ度一言如此ニ御座候敬具

外山正一

拜啓過日ハ貴著之言海御惠贈被成下奉鳴謝候本書御編纂之事ハ豫テ承知仕誠ニ今日最必要最有益之擧ト深ク御贊成申候事ニテ其事業ノ極メテ困難ナル事モ親シク御話モ承リ推察モ致居候得共貴兄非常之熱心ト忍耐トヲ以テ御拮据之事故早晚必ズ完成之日アルベシト竊ニ期待仕居候處果シテ今日ノ結果ヲ見ルニ至リ候儀愉快申盡シガタク本邦文學上空前之一大著ト稱センモ敢テ過頌ナラザルベシト信ジ申候貴家ト小生之家トハ三世締交ヲ重ネ來リ今日貴兄ニシテ本邦ノ「ジョンソン」「リットレー」タルノ名譽ヲ博セラレタル事小生ニ在テハ啻ニ公益ノ爲ノミナラズ私情ノ上ニ於テモ欣躍之ヲ悅バザルヲ得ザル事ニ御座候依テ聊所感ヲ述ベテ謝意ヲ表シ候謹具

菊池大麓

右ノ外ニ祝文詩歌ノ賀章等數多アレド略ス諸新聞紙モ亦皆其著作發刊ノ事ヲ稱評ス其一二ヲ左ニ揭グ

○民間の偉功に報酬なき乎

「日本」新聞六月廿八日ノ社說ノ摘要

凡そ士君子の偉業を企つる者は豈に初より其の報酬を世に要むるあらんや、奮ひて人の爲し難きを爲し百難を排して以て其の志を成す者は固より小利小名を一時に博せんと欲するにはあらざるなり。然りと雖も、社會は其功績に對して無感覺に經過すべからず、其人固より報を當世の社會に望まずと雖ども、當世の社會之に報酬する所なければ、是れ其の社會は善惡の知覺なきものなり道義の感想なきものなり。大著述大出版を爲す者の如きは今日に在りて營利心の能く促す所にあらず、必ずや其の人の銳意勵行以て公義に赴くありて而る後に始めて其の功を成す、是れ豈に今世に得易きの事ならんや、（中略）

大槻文彥氏の言海に於けるは猶ほ褒揚すべきものあり言海は邦語字典なり、吾人が日常用ゆる所の語料數萬個を擧げて一々之に解說を加へ、且つ其の種類を分ちて又た語法を示し、之れを一大册に網羅し盡したるは明治の時代著述出版ありて以來曾て見ざる所の偉業にあらずや。氏の此業に心を潛むること十有七年、資產の貯あるなく、俸祿の給あるなく、貧困を侵し災禍を冒して一意其の成功を期し、遂に本月に至りて之を世に公にすることを得たるなり、堅忍不拔の氣象あるにあらずんば爲んぞ能く此に至るを得んや。是れ最も今世に見易からざるの偉業と云ふべし。夫れ國にして邦語字典なきは獨り其の邦人の不便利にあらず又た外人の不便利なり。獨り學者社會の不名譽にあらず又た國家全般の不名譽なり、大槻氏は一匹夫の身を以て奮ひて此の不便利及び此の不名譽を補ふことに當り、十七年の星霜を費して之を成就したるもの、吾輩は其の非常の勇氣義心に服せざるを得ず。世に名位を擁し俸祿を食み自ら鴻儒碩學を以て任ずるものは多し、而して彼れ果して何事を爲したるか、大費を國庫に仰ぎ厚俸を與へて人を集め、修史と云ひ編纂と云ひ又は取調と云ふもの、擧げて數ふべからず、而して能く大著述大出版を仕遂げたるものは幾何あるか、吾輩は編者の偉功を褒揚すると共に其偉功に比すべきものの世に希なることを深く國の爲めに恥づ。

學位と云ひ、名爵と云ひ、勳等と云ひ、位階と云ひ、又た所謂る褒賞と云ふ、斯の如き道具は何用の爲に存在する乎、與ふべきに與へずして與ふべからざるに與ふ吾輩は寧ろ彼の虛飾なる制度の世に無からんことを欲するのみ、何となれば斯の如きもの反りて國家の無感覺を表し社會の不道義を增せばなり。編者豈に始より報酬を一時に望みて此の偉功を爲さんや、此の偉業に報酬を與へざるも吾輩は編者の爲に之れを遺憾とせず唯だ國家の爲め社會の爲め明治の昭代の爲めに深く之を遺憾と爲すのみ。良心ある者は吾輩の言に三思して赧然たることあるべきなり。

讀賣新聞七月一日二日の社說の摘要

○二大新著を論じて文學獎勵の方法に及ぶ

新內閣の組織成るや、政黨家は狂する計りに騷ぎ廻り、新劇場の造營成るや、都人士は逆上するまでに騷ぎ立つ、政黨の領袖、僅に數日の巡回を試みれば黨員は、其歸るに臨むで、盛大の宴を張りて、厚く其勞を慰し、其功を稱して措かず、政府の官吏巨萬の金を抛ち、數百の人を役し、其の職務上より僅に一事を成し了れば、或は頌德の表を奉る、而して文學の士多年の苦辛を積み、獨力能く稀世の大著述を爲すものあるも、之が爲めに慰勞の會を開くものもなく、彰勳の表を贈るものなきは抑々何ぞや、苟も多少政治の分子を包含すれば、溝渠浚ひ委員と雖も、其事業を石に刻まれ、苟も官海に緣ある人は、區々たる外國文書の翻譯を爲すも、尙且つ大枚數千金の賞を受け、其勢少からずと稱へらる、吁々名譽は政海官海の專有物なる乎、何ぞ政海の人の多幸なる、何ぞ官界の人の多福なる。

大槻文彥氏の著に係る「言海」と、田口卯吉氏の編纂に係る「日本社會事彙」は、余輩之を近世の二大著述と云ふに躊躇せず、「言海」は古今雅俗の日本語三萬九千餘を收め、語每に精確なる語原、方法を附し、其枚數一千二百餘頁に涉るの大辭典にして之を完成するに、大槻氏は十七年の苦辛を嘗めたりと云ふ、

吁々言文の紛亂今日の如き時に方り、之を能く整理して、一部大辭典を著す、豈容易の業ならんや云々、此の二書にして、假令成功の上は、必然大利を博し得べきものなりとするも、人の之れに手を下すものは幾ど少れなり、況んや我國目下の富度より考ふれば、此兩書の如きは、一時多くの購讀者を得る能はざること明かなるに於てをや、吁々滔々たる天下利の爲に驅られて、僅に小著作をなし、以て得々たるの今日、營利を度外に措て、滿幅の精神を大著述に委ぬ、文學興起に熱心なるものにあらずして、焉んぞ能く如此なるを得んや、

若し精密に吟味し來れば、社會事彙、言海の二書、固より瑕瑾少しとせず且つ此般の書には、多く編者の創意（オリジナリティ）を要せざるが故に、之を大著と云ふを得べく、未だ以て名著と云ふを得ず、然れども方今文學界に缺く所のものは、寧ろ此等忍耐の結果たる大著なることを思へば、余輩は之を好著作と呼ぶに躊躇せざるなり、且つ其瑕瑾の如きは、編者後日之れを補ふを得べく、又世間自ら之を大成するの人あらん、余輩は唯だ我文學界の二大缺漏が、此の二大新著によりて幾分か充されたるを喜ぶのみ、何ぞ又他を云ふの遑あらんや、

今日、幾んど時を同うして此の兩書の出版されたるは、二束三文の小册子續々梓に上り、絕えて大著の出でざる余輩我文學界の爲に之れを賀し、又現在未來幾十百萬の讀者に代りて深く編者の勞を謝せずんばあらざるなり、頃日「言海」の成るや、編者の友人相謀りて一大祝宴を張り、廣く文學の士を會して、編者の苦辛を公告せり、余輩は之れを以て洵に善き企となし、手を拍つて文學の爲めに喜べり、冀くは斯る催しの我文學界の習慣となり、良著の出る每に盛會を開き、一には著者の勞を慰め、一には其の名譽を顯彰せんことを、これ余輩が文學獎勵の一手段として冀望に耐へざる所、殊に言海、社會事彙の二書に就て言ふにあらざるなり、

然りと雖も上陳の如き計劃は、唯だ一時著者を滿足せしむるの手段に過ぎず、若し夫れ其の名譽を廣く且つ永遠に表彰せんとせば、別に手段なき能はず、余輩は賞勳の制度完備せる今日獨り文學に於てこれ無きは、我國の一大缺點なりと信ずるなり、固より文學の士は名の爲に文を作るものにあらず、譽を欲して筆を役するものにあらず、之れが爲殊に名譽表彰の手段を設くるが如きは、識見ある文學者の却つて欲せざる所ならん、然れども之を表彰するは實に國家の義務なり、國家豈に之を怠る可けんや、

（以下略）

○高山彦九郎大人海外旅行投宿の為の門前に高張を掛きしころ銀の人と[illegible]
も既に別しを知つたが中の大概が文部省の八等官任
を辞し、家事係蒙を命ぜられ此節会計局にありて奏
等の治表を惹いた[illegible]言海は十七年を積んで世に出
られたが其の著行を祝する為めに開いた会の模
様は最も傳史中のことなる[illegible]
八月頃の記録を印刷したものと[illegible]
もの[illegible]ある。当時菊池大麓はじめ[illegible]の英語部典
を以て言海と比したるが、[illegible]
此未出版されたる多くの字書辞典が発表の[illegible]

辟易し、此為大概文部の前に高張[illegible]

るや、都人士は逆上するまでに驚
に数日の巡回を試みれば羅員は、其歓る
の宴を張りて、厚く其勞を慰し、其功を
奴好の官吏三寸の金を抛ち、数百[illegible]

跋列されたる結果、何人をも立派な第一と思はれた。先ず
評判や分量の上で云ふのではなく編制が第一きを得た
題材の為である。跋列中の日本文法に関する考察多く見る
べきが大概の学者と異なる見解上日本文典を制定する
に苦心した人の独逸のグリム兄弟が独逸語学典
を編まれた先方独逸語文典を大成したのと一番
の淵源である。志うしグリム兄弟が大概の如く学典を完
成し得たるごとく。十七年の歳月を費やし前人を満い帝
山家の言ふ不二撰まと三ヵ月間と云ふ
ゝ流布の度ごとに思ふべしとなり、和この学書の
採つた資料の三万九千余語きそうつたのが、かうなる
大言海の採録は二十万語に及んでゐる。新撰の主

大言海

發音　殆ど各語につき歴史的假名遣、表音片假名で旁註した。

語原　語義を確實に把握するには先づ語原を究めざるべからず、殆ど各語の下に〔 〕を劃して、著者の考説を記して之に最も力を用ゐ、あらゆる方面より攻究論證、中には一語の考證に一頁を費したのも珍らしくない。

語釋　(一)(二)(三)を劃して原義より漸次轉義に及び大抵簡潔乍ら更に詳細に亙る。

出典　本語と關係ふかき所を摘録し、語によりては數書より引例、時代により順次列擧、意義用法の變化を實例によつて明白にし、且年代、著者、卷名、丁數等委曲に記す。

標語　二種の平假名にて國語・漢語を類別す。すなはち第一種(な。ま。ま。と。す。)は國語にのみ用ひ、第二種(あ。こ。し。と。も。)は漢語にのみ用ゐた。但し志は漢語、しとは國語の語中、語尾に用ゐたものもある。

言海

主なる語の記字法と表音のちがふ部分だけに旁註す。

語原の考説は舊版以來の特色ではあるが、未だ説明も短く委曲を盡すに至らない

解釋の簡潔明晰は舊版の特色であつたが、時に語つて詳かでない憾があつた。

引例文のみ擧げ、出所一切は紙幅超過をおそれて省略す。

新版「大言海」は採取語數實に二十萬、大きさに於ては四六倍大判・約四千頁、舊版の約三倍、これを組版にて比較すると舊版一册で約二倍、全四卷で約四倍五倍の驚くべき數字を示します。

今相違)を期
期するとと上表
の如くであつて
大言海に於て
大いの備つた観
がある。活字の位
方も明る複雑
で二十六種の活
字を使用した
ある。全部四巻
で十二巻い来
年五月に出し

本三巻は来年十一月頃に出し、末巻は四五月九年の春出す筈なり、富山家の高氣集は百歳部に変ずるなり、大槻伯士は八十二の長寿を保つたが、此の大高海を渡るまでは二十年幸福をつけたまひある。人の忍耐努力と云ふものも其の結果を見ると実に驚嘆するものがある。ジヨンソンの字書の発刊に際し、ボスウエルは多士濟々全盛の英国に於て制を大槻に附いて出来たと称賛したとあるが、一人の手で出来たと称賛したとあるが、大槻に附いても同じことが云ひ得るのである。（十一月十一日）

○菌茸の形を似るものは蓋と似るものあり、蓋は柄と柄茸と称するものあり、巨刹の殿堂伽藍の尚書に相似たるものあり、漢籍面に例

榛原製

の陰陽を以て之を解す、勝しがたきも説なるも笑ふべし、傅と云ふ之を相医説に云く

菌の形を成すは松蕈椎蕈の類は其樹の精なるものなり、故に其形頭円平潔し、茎中実す、之陽に属し気の凝るものなり、毒野菌、木耳の類頭凹まり滋潤し茎中空なるものは陰に属し血の凝るものなり、因て考ふるに、陰茎の形、菌の類なるは共に精気より出る所のものなるべし、草木の精気天地の化を得て、純粋の気を聚めて成るものは菌

多人の陽氣純粹の特色を形成する茎
葉、これ其形自らに似さるを得さるの理なり、
腐草の蘚土に生ずる所の菌も其形亦相類
す、木茸の類と雖ども其形皆平頭凹伏すと
雖ども陰濕に本つくものなり陰菌なり、これ亦陰
敷皮重複の形を似て、是を宜むなり、木茸
を生ずるの樹上又菌を生ずることなし、又樹
ずるに丸て木茸の樹上に在て一旦乾枯すと
雖ども一度雨濕を受る時は急に寛暢滋潤す、
又日に向ふ時は急に乾枯す、是年許を経ると
雖ども一度雨濕を得れば又本のごとし、木菌に比べて
日々生長し、長極まれば枯す、木茸の

長久に及ぶのみ、是亦陽は表に易く、陰は久しく
保つの理なり

○昨日書史会要四人家四業家の部に会し、十九日
稀覯書刊本陳列会を催すべき種々折合をなす
北白安田氏より示さんなるべき大経二巻同書二部
大字経の一は仏説中心経にて仏体彫る美なる巻
尾「書元」の朱印を捺す、他の一巻「在家布薩
法第七」にて東大寺の印二ヶ所あり、本書内容
序一 略表二 前方便 三 正行第四
後方便 五
珍らしき経なり、書も亦佳なり、他の一巻と共に天
平七字なること疑を容んず

同志ハ

一四書　土用

此書体裁正平論語ニ酷似ス、六行十三字大字ニモ相心ヲ以ル所謂内府ヲ以ル印記ヲ編ム

播州斑鳩
伊藤隆治

此書者君ノ手ヲ以ル余初メテ寛用ス

巻末ノ識語ニ

今茲一書　夫子之遺言而漢朝諸儒所注解也宜是五経之糟粕六藝之喉衿也天下為民生者豈不仰其德矣

榛原製

明夜龍集己未仲秋良日

西関平　武辺敬重刊

一所成敗式目　貞永元年八月十日　一冊

巻尾ニ

享禄己丑秋八月日

従四位下行左大史兼博士小槻宿禰

伊藤

此書式目中尤モ珍重スベキ享禄己丑ハ二年ニ當ル事モ尊ブベキ

納めシ人ト覚ル

此日仕合セヲ〻〻ハ長ク〻〻陽洲国家ヲ皇室

一冊二書を混淆し得ること、又中宮者同方奏し奉仕の人なり、手蓉の寫生を活ん
とする特に推ぐ来る

三蘇文粋　　廿八本

七冊ゥ一を一帙とし四帙あり、
十四行細字本にて宋本の面目躍如
乾隆珍寶と印「天祿琳琅」「天
祿琳琅」等の印を捨てるおこ太上
皇帝之寶」立福堂代堂寶」等の
印記あり

榛原製

劉子　　十本

五冊ゥ一を一帙とし納め二帙となる
九行本にて裏打あり前記と同校
の印捺してあり、宋版の
面目を具えたる精刻にて
ハバ進々疑を生じ来る、排字整い
さる所あり、字ちらして墨色深淡あ
り、字を闕もし白ゥ一を存する所あり、
終に顛倒の字を書見し、宋日字体
活字本なること分明なり、宋代に流
字ちらもの見くさんば、精かに紙質
を検するに、裏打あり

九条時代の紙なるべく似寄、恐らく菊
屋氏の所蔵本なるべし。乾隆年間の
本なりとて一概に信ずべからざるべし。此
巻は京都の新村出博士なる、丸善から出版せられし
写真版きやや屋うとうと輸入し
写真版を示さる。北書の面目は略々知る
ことなるべし。珍らしく感じたるは表紙裏に桐の
紋模様あることなり。是は公時代色が見あらくと見
へたるのみ。
北日録と本会の紀念出版と複製中の宋本術
注疏注出来、只今、飯布し居る。北書は狩谷棭斎
蔵本なる後未村西詳の手に帰し、木村氏宮

内省く献じたるものなり、棭斎の本書中の潮業を
捨して北宋天聖の道祖の刻本と称し、学者を摹
刻して世に弘めたることなり、然れども複本の物
は今次のものの原版ならず、今次のものは古色まむ模
し得たり附すること校勘記一冊を以てせり。（十一月
十三日記）

○橋南溪の性宗琉球の日本の酒と支那人のことを
記す。

酒の今のごとく清酒となりしは慶長百四五十年
北かたのことなれど、今日西国の俗は清酒
なり、唐土なるも清酒多しと雖、殊の日本
は米穀豊なれば、酒も一味

味噌と云ふものも西洋より来る度
人の往来の人々絶えざるといふ上戸なれば酒より来
り日本の酒はなれば往来の三が一も日数を経ず
酢酒すなわち海を渡り来る程毒酒といく
る度人年六十を過きれば心往来の沢族連れ
なれば年毎に数万千里の大海を渡て
日本の商ひ今いまだ程なくやめ候ひて残るべ
しと云へども往ひて二三年も往来を渡れば
なれば彼国のことを悟り難くて又四年
とし毎に渡り来れば、いかることなれば一
日本の彼と合ひ馴れ来れば彼国の酒の心ら難
く米二酒米三味噌汁なる者の如きなり

横原制

昔の事日用のことなれば往来後に二十の年月の
昨なれども六十餘年を渡り来れば
日本の馴れぬ故に地く難く渡海中渡て日本
の米味噌の穀を元らも合ひ難く久しく渡
海せざれば、別段と合味と香りを換る人日
の慣れもなれば、常に地の如く用ひ
難く、唯南ひの為なる渡海をといへ心共
さて一年半年の公務を勤めも男
なる人目なれば三ヶ月よりければ元ちん迄八日本
の如く通ふべしとも、又毒を渡年に付て
渡海なるべし、誠に米味噌酒香の如の穀
日用のものなれば我国の成長する人い共よき

[illegible]花山院の珍味を含み来たる香り
とゝふべし

○日本の今の婦人は西洋の例を指輪を飾りとはめ
たれど指輪をはめる起原を見ぬることおかしゝ（僕の
考）西洋の起原は知らねど支那にそは古くより
延て此るこゝ、月経のときもこれを左指にはめること
と、古書にあり、古今叢書巻之廿一下の婦
人首飾の部に戒指又手環とありて、注に
古者后妃辭妾御于君所、當御者以環（近
之、脈則以金環退之、近者右手、退者左
手、戒手則共事也
之は后妃進御の為めなるものなる　工口テックのあ

[illegible]今は恍惚唯此飾りとのみ心はとゞまるもの
なるべし、麝香は雄か雌を誘ふ工口テック
の香ゝ、えんを[illegible]す、婦人の必用のある
のも亦えんを助ける

○家略は今合同として人の長ぶるもの[illegible]
人庭あるべからざるし　と云ふ、吟花園の友人と
[illegible]を設ける[illegible]の四畳半を今も家略を
合いずと云、或は家略は[illegible]
て共東の悪臭あり、あるべき家略の別
室庭園は田舎の悪臭を去ること
少けり、いつぞや[illegible]えんを[illegible]
尾茂蔦の茅屋に残りし　と云書[illegible]

らくり

家野いもと庭の老木茅に於て無之候共
さすがこと有り、四月八日の夕共玉ふを合す、是を
吟（八中凡を為ちすと云合ふ事多し、肉の出きへ
事を廓内の者等、若し合ふ時に悪しき時は、を
為すと云人々おそれ多し、深川仙台に始終あり
凡仙台つていやしく傳も意なり、猶之為ひ
見とり正しき時は、あひると異なれ
り、一説あり、或る人金二朱を得たりしが
廓内にて、やはり仕へどえるこの事、扨しも青
の十九の、侍馬何の腐市とて大の無為なり　こんば望　日百比
扨海に用ある悪数
を云う所のあてんにる為なり　為を持ちりき、混雑の為

榛原製

れに使かへい通るべしと市ちりきしが、野多く並
べ立て見世あり、一朋何程と問へば金一分と云ふ是を
二朱に買けさせ、例の二朱銀を渡せば混雑のき
わ能くも見すして取りけり、彼の者大いに喜こび
かめ高を肩にかけ、喜氣揚々として帰り、家人
に渡りて、我こそのよき拵出しものなり、以て料理
して椀飯振舞とと為みえちしに、主人
見てこの時に拵出せしと云ふ家野なり、油と出る
こと油、油くること、油人を欺もかんとして、却
て人を欺かるとは此之事なり、はたして家野なりけれ、
大き無茶を拵らへて花咲なり。七とも志

紙をひろげ、（注）しはあることもあるべし、酒の
の肴としさたはけとりの酒に捨てとりとる。
茶と鍋食の酒ともに上の類といふ品は、下都と云
へど食のさらしかい、今い貴人も賞玩すと書めんなり。
あひるも進ぜ吟ひ物をもあいがもと
あるべし花を呼びて使ひしとも、世の料理ものも
驚きて捨のいろ〳〵なり。
○自分の性年多く茶屋を集め紙、書簡と就て
いろ〳〵のことを書いたり、手紙に関することを語つ
て書き扱さしたりして大抵のるに知つてのるつもれ
が、浅草の茶の秘方境のある茶の本内も赤手紙の
一種流とるものであることを始めて知つた。此の茶の平内

横原制

の像い人殺しをしたるもの、いろしら張弦び
の神のやうなものこと、ろ。もとのふみつけうる心
俳蔵の意が「文をつける」と称し、しばらくは時
代きの御殿女中から「平内殺養る中屋知らう」と
て、知けれるものとなりけり。大意ろるものなりと云、此
の文を扱ふ茶屋があり文茶屋と云て初めは一
軒張るに過ぎず、一軒張くれが、手紙一本を三文の
知け賃をつけれと云ふ。ある文の方々から来るのが、究か
ら直ちにでも渡すことく文換的に持込んだ方に持込られ
たのとなるに、御殿女中ならば、いろ〳〵の心意気が言はんば
おを切つて捨んで見ると、いろ〳〵の来るのを持ちたさせ
あるに、あるれを抜くとか、ぬかぬとか、（注）うらのやうなる

び、それを読んで或いは喜び或いは怒つたりしたとゝふが、なんと笑ふべき手紙の一挿話としても逸しがたいものがある。

○むかしいめうな会があつた、如百話（後篇）の内なる左のやうな挿話がのつてゐる。

昔いとくとくなるひがやつて来たこゝろ、昔の会合は、従来の中央を占めてゐたのであるが、頃と手紙を載せて、軒下傍ひのあばら屋がそれを奪つて、松右ェつぎすぎて、「今日はッ、松右ェつぎごとこいますが、何日いこちらさまの御中興の何々院さま、御南家さま御大切の御せさまの三十三回忌でございます。どうぞ御帳場よりしく」とか「奥へ仰あつて下さいます」とか中

まで、オヤくと思つて、日記を繰つひろげますと、その通りですから、いくらかをやうずるいみなんまもんやりますと、其日チヤントお寺へ来てゐて、下足番をすると云つた者の内の会合の内親がありつぱ人ですが、こんが御維新の時、松右ェつがやつて来ての話に、「御維新で私もあがつてそうで、毎日を御法事のおいらをを頂きました、モーかうなつちや、私ゝの法事時も何もあつたもんぢやない、これでもこれ迄通い中間で千あのの元引ぢつぱ人ですが」云々と云ふのである。

○京都日報月報（明治四十年）

標原制

與太本道中記（3）

波久貞作

3

一晝夜といふもの汽車で搖られ續けて、さてやつと降された所は青森縣の太平洋岸に面した×といふ町である。大半が漁家で出來てゐる、日中でも餘り人通りのない佗しい町だ。

そこの、これも×書店、といふと甚だ體裁がいゝが、二間々口を半分に切つて、一方は土間になつてゐて醬油だとか味噌だとかの這入つてゐる樽が並んであり、他の一方が二尺ばかり高くなつてゐて疊が敷かれてあつて、そこに新刊の雜誌類が瓶々に並んでゐるのである。そして、突き當りの壁側にどこかの圓本全集の棚が一つあり、それと同列に小さな肩身が狹くなるやうにも見窶らしい棚が三つほど置かれてあつて、その一つには麗々しく「新刊書」といふ見出しがついてゐたには思はず顏が赤くなつた。無論自分達はその棚の中へ押しこめられたのである。

「ひどい所へ來たものだな」まさかこんな所へ來やうとは何が何でも思つてゐなかつたので、自分は悵然たる思ひで同僚に向つてさういつた。すると同僚は、案外に落ちついたもので、

「今更泣き言をいつたつて始まらないさ。もうこうなつたら、せめて人が住んでゐるといふことで諦らめて、後は呑氣に東京へ歸へるまで寢てればいゝ。どうせこんな所にゐる文學青年に讀ましたつて仕樣がない小說だからな」

—といふと、この邊には碌な文學青年がゐない、とでもいふ意味かい」

「なにさ、文學青年は上等でも、俺達の身上が身上だつてことよ。今時の若い、然も文學でも嚙らうといふぃゝ青年が、寒山なんて奴のものを振り向くかつてのさ。まあどつちでもいゝさ」

それで自分は、もう同僚と話をしても仕樣がないと思つたので、一緒に來は來たが別の棚へ詰めこまれた奴に話しかけた。

「どうだい、こゝで賣れて了ふ自

(1) 1599 （慶長四年）。

Gvia do Pecador (*Vignette*) **In Collegio Iaponico Societatis Iesv.** Cum facultate Ordinarij, & Superiorum. Anno M.D.XCIX.

（きやとへかとる・罪人を善に導くの儀也。御出世以來千五百九十九年・慶長四年正月下旬鏤梓也）

ぎやどぺかどる解說

村　岡　典　嗣

本書は、往時「基督のまねび」と並んで、吉利支丹信徒の間に讀讀せられしものにて、種々の點に於いて、吉利支丹書中に代表的地位を占む。原書 Guia do Pecador（罪人の導き）は、西班牙生れのドミニコ派の高僧 Luis de Granada (1508—1558) の著はすところ（一五五五年、弘治元年刊）歐洲公教文學の名著として、刊行後まもなく諸國語に飜譯せられたるが、本書は同じく四十四年後、卽ち英譯本が倫敦にて公けにせられし翌年に當る慶長四年（一五九九年）、正月下旬（上卷）及び潤三月中旬（下卷）兩次の鏤梓なり。原文に多少の省略を施したるが、その用意つたなからず、かつよく中世基督教神學の觀念や、思想や、殊に情操を、全く文脈を異にせる我が時樣に移し傳へて、詞藻また豐かに、頗ぶる推奬に價する成績を示せり。譯者の名を知るよしなきも、當時の教會の卓れたる文筆の士（必ずしも一人にはあらざるべきが）なること、言ふを俟たず。吉利支丹版の他の一群の羅馬字本と異る邦字本の類にて、版式は活字なるが、京都系、長崎系中の後者に屬し、やがて出版の場所も同地ならむと思はる。歐字、歐文を交へたるを始め、印刷樣式に歐風を採れるもの少なからず、又「でうす」以下の四語に造字を用ゐたる等、すべて我國書史上の異色たり。

本書は、他の吉利支丹版と共に世界的稀覯書に屬し、その現存の、在來知られたるもの下の如し。

（一）倫敦大英博物館文庫藏本（上下二卷完本・脫落下卷に一枚あり）
（二）巴里國民文庫藏本（下卷・脫落四枚あり）
（三）羅馬バルベリニ文庫藏本（下卷・卷末なる「字集」十二枚の殘簡）
（四）倫敦マツグス書店舊在庫本（下卷）
　一九二六年刊行の同店目錄 No. 483 "Printed Books and Manuscripts on Japan." に記載せられたるも、既に "sold" とあたり、幸田成友氏によれば、葡萄牙王室の有に歸せるもの〻如し。

而して陳列本は以上の四部以外に、新たに一部を加へたるものなり。上卷のみにて下卷を缺くも、上卷は大英博物館文庫のひとり之を藏するところ。かつ陳列本は、之を大英博物館本に比するに、卷末の「集字」の部に於いて小異あり。卽ち後者は同部凡て十一枚なるが、前者は十二枚ありて一枚多く、その第八枚の裡第七行に數語少きも、第十一枚の裏以下に於いて、語彙はるかに加はれり。けだし大英博物館文庫本は、單字の一群に續いて熟字の一群を立て、それにて終りたるが、陳列本はその熟字の部に於いて、語數を增せるのみならず、次に再び單字の一群を添へたり。「字集」以外には「目錄」附「違字」合せて二枚、「序」本文合計百七枚、凡て全く同樣なり。（尙本文の誤植を正せる「違字少々」十一箇條がうち、第百五枚の裡十五行「究るは究め也」とあるもの〻み、陳列本の本文には「違字少々」中にはそのま〻記されたるに拘らず、之を訂正して、「究め」となれり。）これによりて考ふるに、陳列本が大英博物館文庫本と同時の、しかも別の後刷なること、疑ひなきもの〻如し。仔細に檢せば、或はなほ、小異の存するものあらむ。用紙また、大英博物館文庫本に比してや〻厚手なりと思はる。察するにこは、バルベリニ文庫所藏の殘簡によりて想像せらる〻下卷後刷本と同種にて、嚴密には世界の一本といふべし。たゞ遺憾とすべきは、大英博物館文庫本によれば、裏面九行に「望」字の顚倒せるを含みて、本書の活字版なることを確認せしむべき一葉、卽ち第九十枚が、何故か破られてあることなり。而してこの一事を外にしては、凡て完備せるのみならず、表紙も裏表紙をそのま〻存し、何等改綴の跡なきこと、また珍重すべし。大英博物館文庫本は、改綴せられて原の表紙なし。マツグス書店舊在庫本は、之を保存して更に革表紙を加へたるもの〻よし。而して巴里本は、原裝のま〻なるが、この二種ともに下卷なり。上卷にして原のすがたをのこせるは陳列本のみとす。殊にその表紙たる、五七の桐の花模樣を銀色にゑがきいだしたる意匠の頗る美術的にして、光悅本、嵯峨本のたゞひを連想せしむるものあるをや。巴里本の表紙は、澁茶色無模樣のたゞの厚紙なり。之に比し來れば、この陳列本は、或は當時の貴族の信者などの手澤本ならずやと思はる。

英佛の地を踏まずば再び見るを得じと思ひつるこの書を、今やはからずもこ〻に寓目するを得ること、我等の驚喜に價す。初めて本書に接する人々の悅び、また少くとも之に劣らざるべし。この書が、このたび丸善書店によりて我國の有に歸せることは、まことに慶賀するに餘りあり。

（昭和七年十月十六日記す）

○四南葵文庫の図書を同○とつた高木文の「好書雅藏」を井上書房から寄せもきた。巻尾に蔵書印と覚しき一印があつて、名家の印が数頁ならべてある。長い間日時した印譜に印譜と印と就て特に考証を書いてある。此人は蔵書家印と趣味があるとの人、且つ自白もしてゐる。偶〻一冬求り此書を示したのが機縁で自分が蔵書印に就ては高木と同趣味であることを強く自分の蒐集せられた印と就て話つた。今〻二十数年前自分の蒐集印譜を低えたことを忘れられたことがある。名家の印記のある古書を強かあれば、書籍を持ちめ、蔵印に拓を、押してもある印を切りぬき、それを冊子に貼付した四年もかゝつて三冊ばかり出来た。それは家に保存してあるが、久しく

複原製

出せなかつたから、脈絡のあるが大抵著名な人の印記である。それから名家の私印を追と蒐集することを思ひ立つて今も見あんが嬉しくなる。その数二百余と迄人び書あるが中に蔵書印記も交つてゐる。其内自最も珍ともあるのは唐末二河の「獨醒樓図書記」と黄州連環鈕と中井敬所が毫厘もみるのに振ると高美芳の低である。横井時冬の孫蔵であつたのが玩後戸の宇こ恰しい。特谷梅南の「赤古獨図書記」は石印で演村茂人翁の低で同人と長い間競争しても琳琅家の前の美人らも賠えれなかつた。観瀑閣の印が三顆あるのこんいみと戸の支蔵寺山美の蔵就び三顆は木印で一顆は彫刻の霸形の印と

同形である、書体も酷似してゐるから、多分同一のものであらう。京山侯は徳川家の人、詩歌集覧の著者であるから、此印は同者に捺した刻であらう。細井廣澤の子九皐自刻の印は数十顆あるが、其内「壽の際堂」「花者印」「一顆」「梅南翁の花者印」などは、ハ号あるもの、又ハ号のみあるが、偽印骨董屋から強印を婿の北方に交つてゐる。こんは面印で一方は文は忘れたが、遠に関する語を刻し一面は「春暉堂花者記」とある。偽印の掘出しを喜ぶ人は、浅草橋通、中井敬儀、池田の村の私印は或は全部家義と偽してゐるが、三人共に花者印がある、山本梅逸の「玉稿堂」の大印は集書家から貰ふ印であるが、関防として刻したもの

榛原製

と思はるゝと自分の花者印とは大抵違つてゐる。梅逸の印ハ皆ちびれと少くから此印は珍花者ときこゆる。広川砂雪渓の私印十数顆を得た中に一顆花記なる

自分の花者印なるものは、「善」の字を用ひたるもの、「鹿」刻の釣印「春城清玩」の印である。両体自分の好む花者と刻を頼人に日面印が多く共に書体を異にする。此日文は「子孫換酒亦可」の語であるが、善の字も換人に刻したのである。同じ阪向で中井敬不の作は「黄雪子孫」とも彫つても子孫の字はアニノヌ、ヌ、と皮肉の語も換人に刻したのである。同じ阪向で中井敬不の作は「黄雪子孫」の文であるが、こんは敬不の最後の作である。絶刻である。竹窓が道楽まで先

子の印書藏

もまと称号の書を受つて收を集ふ料とし、又、それを
自分で誠め、此書不換收の印を刻し、其の裏面に
倣つて「此書不換酒」の印を作ることもある。「楠文庫
也文庫」の印は曾つてもたいへん数書簡を美く集め
た時の目録記にあり、楠瀬日年の刻した「六特廬」
古の印は寶義の古文書と称する用てあり、金石文
と称する印も六特廬(金石)の印もある。「伝海居」
書泥」の石印は字うの家祖の印で古く家に伝はる
手の印書(六書)、消息、夫印譜、史記、法帖)など
の印のあるは皆な家祖手沢の本である
尚は都書印と就て一二思ひ出ることがある。北宋頼寿
伯と伴に其の舊邸清涼の高松に赴きて義書

のた調べをした時に義書印は失はれて白のみのことを
多くし、印影を申学に持ち帰り、去四年(
(四山大正)つ人)と模刻せられて紀念とし伯と称つた
ことがあるが今は家の図書と称した長方の北の
模刻印で「投雪閣図書記」の長方形の木印もある
が伯学家ひい特と亟を低つて余り称つたことが亟面
と刻せられてある筆跡。自分が早大の図書館を主宰した頃
さい頃の図書記をいくつか低つた、其内に多年で刻した
印鑑が幕面用ひられてゐるが、これは先考の友人蛙巣の
低で、千谷北印が表四しん寸の先
考が筆を執られた手元の書)した日の先
演村義六で「早稲田文庫」の銅印を低つて贈つたが、流の紀念にも示めべきものだ。

銅印は捨てるくらいで一向に用ひず自分の袋中に入れもの
が、中井敬所氏は早大の校印を刻されたことがあるが、其い
今も用いてある大学の石印が、其後花書印を相談
したが、敬所は「金沢文庫」の長方形の印と似ふべし
と云て、自から丁寧に字句を示された。流石に印
の火前火後の印規を知り出して示された。流石に印
の専門家だけあつて、花書印の金沢形が狭い為
白く抜く得て、書物を犯すことの最も軽いこと
であることを心得てゐたが、花書印は終に刻を頼
まずに捨てつた。
図書に花書印を捺することは、其の不穏を防かするの
みかは主意であることは勿論だが、書物を愛重する

標原製

ものであれば、書物の富を減ずるだけ汚濁しまの用意
かるべきは言ふまでもない。実を云へば花書印は書物
の或る部分に一痕を印するのは一つの瑕疵でも仮さ
るべきものである。大きな印を文字の上に押したり、
さまざまの印を紙面のある限りべタベタ押すなどは
図書に対する大なる冒瀆である。別して俗悪の印
を押すことは駄目の権威を装し識者は
れあるべきを嗤棄することがある。例へばゴム印
などもインキで捺したとすれば古書を見た所新会す
ぬ不愉快を感じるであらうか、貸本屋の
花書印は高度の仕切判とでもいふべきもの、
るが、それは説くまでも捺したものであるから思べつが花

相南の印者に捨されてあるなどとまんが形ちく書物
あるんハ使本屋本人と云ふと人と思まんまもあ
らう。名もなき人の印ハ其印が設令雅俗であつても心を
の印者の後継者の迷惑の場合が少なくなハ。これを
考へること、印者物を愛重するからと云ふて自家の秘蔵
印をやたら捨すことを表(発露)して欲しくなる。実ハ
印者の愛重者の旁指ハ自家の印と書物を汚す
ことなき、愛重するなら一点も書物を汚さない
やう心掛ねばならぬ。相南の蔵書家にあつた近代
の中川徳基などハ極めて印形の印を邪
魔さるるを嫌と捨すを例とした。通ね(通ね)の意が
不のめしと奥床しく感する。寺田望南などハ自

横原制

分の蔵本のあるまで墨書することを術ふた色の
点賞でなく愛する癖(癖)なり。淺草雷門の印
を捨した其印ハ極めて形ちあるなれ。彼り黄塵
を吟すよりもこのいから其の心術や術氣ハ厭めべき
ものである。人を信ずハ「其を過眼」などの印を捨した者
つて一説を信ずことを現ハす人がある。これハ支那の
風と微つた比の比が、自分のの蔵書を捨する者を
もこのいから往さまして他人らも捨り合ハた者
も捨す人のあるのハ罪悪である。島田翰のぬき回
書ハ「島田翰漫筆記」の大印を人ら偽りたもの
無(無)意と捨する癖があつた。北蔵と蔵する黄塵
書と其の痕跡の在するのを見ること、何とても賜ぶ

あるかと思われて疑を氣がする。鞆の図書寮で紙中の墨
跡は出来もある。現在古書の鑑定家として名高き徳富蘇
峰の所考にも鞆とあるとこと、所考印を次つもあれ
ら書物を汚損することの甚しいことである。印を新しい
一向理解のない人と見へてどの印を見ても仮恵の駄
目であるが、それを大小いくつも捺して図書物の学者
設しもあるのは何ともの不確慎である。
書物を尊敬し愛重の念が深ければ深いほど所考印
を捺することは慎重の上にも慎重を加へなければならぬ、又印の刻
も相当の意匠に拘わらるべき、極図端を示と所考記の
絶対に無いことを主張することが実に所考
記の書物の来歴を語るものである。鞆の図書寮で紙中の墨

標原制

跡のあることを大切な意味があるから、一概に極論を喝ふべきでない。有名な寺
院や旧家などの所考記のあるのは其書の刊年
などが知れるまでもなく其の手沢の保る故を以て
書物を尊重を落くことがある。例へば光明皇后
の「内家私印」の所記があることや、吉備学院や天満の
所記があることや、羅山、契沖、真淵、宣長の所記があ
ることや、法隆寺を始め立山の印記があることなどは
単に其の来歴が知れるのみならず、其書物を一種の
風雅を加へるのである。好書家の喜ぶのは尚ほ
此等を捺してある印記い等図古雅掬すべきものがあ
って、単なる読つ[illegible]ばき、繊毫も後世の衒

氣がするのだ、書物の骨頂をうるうるの所が嬉しい。以上
八手が前出地につき詩つれた大眼びあるる　十一月廿日記
○ぼうを朝から晩まで芸香風意と絵めるに、如何
をう書史、今の創主後義本新講十輪と出
した紀念会と、四利稀觀本別講会を設育会設
こ開催した、宝前の稀を天平から天正まで
九十題、関西まで手を延ばして、傳うの日子
こ傳り出し、日的こまるおもしろ原
い影講一冊を心つけるのであるから南方者の別
を拾めたが幸に問の会つて、南の出陳の品の解
題目録を出来た、今後の稀の
会を楽めうと思ひます。

欲ぼしたる。
平等院
橋原製

うの比が陳列ちうう一度列品を見れば、見て出来た
るものもあるものがあるから、そうが一年
して一番こ見ることの出来ないことの出来
ない。何人とこつても稀觀ないの南北朝時代とおつて存
するものい大抵佛もびある。今なの陳列い実本
派つたから別も佛もがまく、才一弾から来井稀
日の前で銀文刊
日の前で賛物のものくういうのだ。ちるけれど
出るいけ、理廣の方案の方いまがあるるもも、
賛朴のものがうく或、自分も新しめるいまがあつ
た、実い或るものを陳めるいの初見巻びあつたからび
ある。幸に用紙の解説が来るうの者物を手まして
うつたがおよそ今得し得た。仕合びあつた。

陸奥を後にして秋冬を迎へ（これの元年）であつたが、一時人の
逆鱗に触れて掛塚の田舎へ蟄居（閉門）
まもなく四月人の赦免があつたのは大事成ひたりしも
くの時分の人であることは言ふまでもない。
元年に和田義盛と京都大学
助を拉して神田川の戦争と山鹿に山鹿素
の子孫で、高行の実弟の百姓と尾し、祇園の手
広く世々家をもつてゐる事と云へば。
で酒宴をしてゐる。高行の弟と云へば、
高行の弟義山と称し法名を修めたが、米子の
恒蔵なる忘れがたし、十年程の
れいとこ、ことがある。四の名なる表題の

かのれが、ちまの救免と、ちうて江戸に殺し共養の牛
辺の寺まであるを、ものまれと。貴今の更なる例なる幕府の何
故福所を浅草の藩と定めれのかと、少人にたら、素の
いもと既に仕へれしまで、浪人とうて幕府の忘
藩を嫌んれ、詳しあるが、舊君の恩因に感
を務めれのとの恭を得ば。貴今の更なる高のも
は枠めを得がたしとの、貴今の名家書籍の大いを集
めれ時も遂に毒の者が手を入らるうれと知
ると、全く新や抱れるを者いれこの極めを少なる
傳かれ有ることの四義要報中報を実、この
他の者報を過きあと。と謂うれ。
庭を入って陳列とあかれ二三の人の為の祇四の集

榛原製

庭と然者の為を傳れ祇四の内容を明めん
四方の主脳もこれ四方の人のび後に貴之
の寺に海り、山客文庫——るどの今方変像四ひな
ること、岩崎の静嘉堂文庫——や東洋文庫も
るどの閉鎖主義であることるの後も出れ
るも不の四傳この四ふことと思れ、貴今の岩崎の家に属する祇
この斯る契のあることと、貴今の岩崎の三義
今紀をあれ以、岩崎家が自由主義を抱
つも心持ってく人を働かかせれかの思ひ出を誘つれが
往時を楽すると本庫の所謂る閉鎖的態
なを解し、重鎮は必竟文庫のことを隠れれ
所をは、官吏が沈滅を陰きれるのれと

たくさんおいで
なった。
■宮吏の古手が宮家出であるから、同者と経歴を
比較し自己を威張りたがる。事務官が内閣から来
ることをやるとは、先輩同志館の洗礼を受けない
から、あまり歓の事だ。今なら称龍同志を傍の出し比較
会、湯のんの時進ずプチ富つたのんるくい交奥の事
務員のあるこまるかつた。こんなことを種々考へた。
いま洋くこまで同志の範囲の事は終はつた。十一
月廿四日記

■大隈総子刀自の邸内にある振新館の刀自の子生を
録しつゝあるが、此頃考へる所を述べられた。その人の性質は驚くべき種
べきものがある。別邸が新築されて義母が移られた

榛原製

別もあるべき雅号を与へられたが、それが
為め新聞紙上に風説を添へることが無つたが、総子
刀自は母の入らるゝ風説を自分は入ることを
つゝ、決して新浴場へ入られることを、青山家風や
の浴場へ入り浴されとかの人は何人も知る相当
の説のある人である。自分をどう考へても時勢を憤
慨されることがあるを思ふ子爵りのことを申さるが
教をそれを故ら少かんと教へしも能徳記あるとがお話
しを承りたいとこゝ云ふと、南越てれ何とも云ふことい
まいと丁寧な田新にならうとのので、記事も所うつく時代な
く、いろの方面で話をおびき出さんとしれ、どうか若
論の半説をうどゝ口をすべらすと、刀自のそれを補へも

全体「名称」と云ふことは、どんな形のものであるか、又問
されたと云ふが、此の反問は冷嘲的に微するものがある。
斯る人々もこの方面の事に不用意の間に
乗ずるものあることは、えんえんとして尽きない
ものである。乳臭の花嫁が失踪したる市民の事は、力自
ハいろくの書籍を読むことが二三年前眼の達者
なれの帯びあへれが、西宮記と云ふ記録まで読んが
居らずとも、旗郎が感心したる事を云ふと、また
ハ何かの問題であらう、貴方の旗人が来られると云ハれるの
で、旗郎ハえんえんことをお泣しまるる及びまして
と云ふと、高ハ○も積まれと申さん為、後さどう方
へられたか、或ハウソを云ふを事不埒快と感じた

榛原製

かのびもあらうか、てざと西宮記を借りて読まれさせ旗
郎を呼んで、今度ハ必ず積人れと云ふが、積
まれなく相手ることと思ふのハ記録の常用語で共通の
ものでありませんが解し難い一二の語を自分と質問されこ
とがあるが、自分も解しかねた。婦人としてハ多く侍
従の人である。二三年前森鷗外氏が浴世絵展覧会
を上野に催した時にまれの観覧に出られた。庭園
に執事の張る紙を一々低首して接礼をされて
ものがあるとは、奥方をもつて女性の貴
あるとは、あの人の婦人は下等さの弱るいれと云ふ
と自然で且つ軟か味があるとして品位を持ハ

に他人の真似難い点がある。

（十一月六日記）

○前の花書記に就て聊か誤り為、図書館旅行に寄り
始を頼まれたので花書印の考察」と云ふことでも書
いて見ようかと考へ、ヨリ〳〵考へたことをこゝに書き
けて前掲の文を補足しやうと思ふ。
花者印に前に書いたことゝ其の不属を標記することが
見が後のもとといろ〳〵と考察の役を立つ本の不特者
の階級及び印の形式が異る大小なども差がある。
大体地位の高い人の印は堂々たる趣がある。政府に属する同
者記の印は大きく特色もある。○皇族方の印などは堂
々たる板（印のあるを切り倒したもの）の方道（陵王府）の印などは一例で
ある。寺院の印も一種の特長があつて、長方形のもの、

榛原製

通例であるけれども、勿論方形円形のもある。花者の
図書記なども長方形である。漢学系の学者の
図書記と図書者系の印とも多くの場合相違がある
前者は唐様が後者は和臭がある、往々後者は
交ぜて印文がある。こんな風な印を見ると見て所為者
いどんな人であるか推測もつく。あるいの名ゝ
花者記の形式は（略々）時代に依つて可ろ〳〵の違がある。
ある時代の印記は質朴で星印で捺したのが多く書
体も篆字などを用ひす、花し用ひるとき俗古篆と云
ふ一種の書を用ひるから、古るい時代であることが容
易に知れる。追々時代が降ると、支那風の印とな
つて来て、そんな種々の変遷があるから、花記を

とおりそ本の時代をいることも出来るから、同書を扱う
こ常るこのん花記の多少の鑑識の具はることを
要する。
花記い所属を標記するものいから、本来自家の姓氏を
記すべきであるが必ずしもそうでいかず、或い号を刻し
或い書斎の名を刻しいりしも千殊萬別であるから、利
唐中まん誰の花書であるかを判し難いものがある。
一人で別号を五つも六つも持つている人が多く往々の別号
を印記として刻してあるとすると、一人の名をもって識
べてある人でも[illegible]ちろろく判しうる。随分中まい唯
以自家の心覚のこと姓氏名と全然関係のない洒印を
押す人がまう一可ろう名の人で然印を花記に応用

複原製

してある人もあるから、印花記に代り斎号を刻ること
とい容易でないが、こんいえんを詮索すること一種の興味
もある課題でとうう要務る印記を追々調べ研究
果てんが来ん歴史上の名高い人びとの花記
えんが多くの本の権威が偉くなることがある。
京都の方人谷村がある仏書を購入の手沢でも
余し迷惑をみれかいろる捨しそある鶴式の印は足利
直義の印とそうて敬意をのしたものの一例である
尚中金の花記言えんべきことは花印と花記花の家を鉄
いてあるこしが少かくずある。併し花家を鉄いて言うこと
れう花書印である場合えかいくくもある。「某々秘笈」の
印の如きい言ふまもなく花記であるから「某々思眼」の

の印などは花記と見做さることもある。但し支那あたりでは
他人の本を借りて読んで過眼の印を捺することもあるから
ら、特種な花記と云へ難いが、日本では花記の代りに「過
眼」を捺してゐるものがある。亦過眼印と同じ意味に「某
讀書記」の印を用へてゐることもある。書狂書淫として醜
名を擅し此某の印がこんであるが、こんなのは識
狡獪の手あから考へたのかもしれぬ。まさか他人のものよ
自分の花記も捺して置けば、後々あらん時の證據に所屬
印ではろくく過眼印などと辨疏する下心が潜んで居るのかも
しれず甚だ剣呑な気がする。○尚ほ蔵書印の内に「曾在
某氏家」と刻したのがある。こんなのは書物の行末を考へ
どうせ自分の死後は人手に帰するに相違ないが、志かし

これでは俺れの所有であつたことを知らせる為めで、自分の手を離る
る、迄「曽て」の字を用ゐるのも早計で、是では所属を争ふ
場合には敗訴となる虞れがある。
普通書物を大切にする人は百代までも子孫に傳へたいと考へ
た。爾の子孫に寶し、だの「子孫之れを寶とせよ」と云ふ趣
る意味を刻したのが多くある。志ある者の反對の印
語を撰ぶものが少くない。「得其人傳之不必子孫」と刻
したり、「子孫換酒亦可」などの印は、前途を見こした印語
で、いくら子孫に寶とせよと云つても是れは覚束ないから、俺れの
死後には賣つて仕舞ふに相違ないとあきらめて斯る印
を用ゐてゐるものもある。現に自分なども此經に属し、自分の
蔵書印には此二顆がある。そして自分は此種の印をアキラメ

榛原製

の印と似て名つけてみる。以上は皆花書記にあるけれども、個
板の印は単用しても所属の標記のようなものから、別に私印
を重ねて捺する面倒もあるし、地紙の印を用ゐることの飽
り感じが生ずるので、木林山竹窓が大切の書物に捺した「北
書不換故」の印があるが、但しかうした「北書不換酒」の印が
ないのは、どうしても白矢張り単用が出来るから、勢んで用
ゐるのは迷きぬが、花記の多数を板に彫ってあるのは、コンナ
ものも引合に出すのであるが、花記の数も甚だ複雑なもの
である。

（十一月廿一の追記）

自分が花記印を板味をもつて四印数を蒐集したことは前
にもちふたが、稀にある古書に捺してある名家の花記を切り
抜くことの書物の部してその骨積で、いつも切り抜を蒐集

標原製

させられた。同じ印がいくつも捺してある場合は差支のな
い部分のを切り抜のはまだ非難もないが、そんなことも痕跡
が残つて書物の疵となる。書物の地紙のあるものは不愉快
のものである。時には花書が花記を塗抹し去るから切り
抜いて変印することがあるが矢張同じく疵物となる
のである。私は書物の貴重さを感ずると切抜が出来な
くなつて日終に蒐集を廃したが、一ト頃は名家花記の
ある故を以つて漠然目的を以つて本を買つたことがある
。名家花記の今現存してゐるものは、その実数
を押して数つたことも感ずるである。人或は花記を模
造するのかと云ふのかも知れぬが、印の模
造でなければ本人でなければ出来ぬ譚のようなもの。繊毫の

善の方いやうに宮すると宮を作用のもとに格好の篆刻家と共も難人する所以。流石に中井敬不もとの依能の人で、第一に早稲田の花記を必ずと其の形式の杉浜もし此時、出して示された金沢文庫の印影四五種に宮した事があつたが、中々真を亂るやうな出来ものだつた。真人がよい可愛れ宮した花印誘をんがの便ある。素人がよい可愛れ宮した花印誘をんがの便位の方いあるある。宮ましく漏らす可らざることの名家の手澤を印こうる本を珍重することの合理的の意味があるが、その手澤なることの何を以て証するかと云ふと、花印者の書入のあるものでも判せらるるが主ら花印記の存するのでこれを証するものであるが

複原製

く、手澤本を重人するかうる花記を重人すべきである。印記を塗抹し切取るのは手澤本なる証跡を抹殺するのだ。

花書記の大小も一考を要する問題である。昔は随分大きな印を用いた花書印は殊に大形であるらしいが、この時代の風潮である、榜銘なども見ても昔は榜柱に日本榜とか形代榜とか大書した刻りつけたものだが、今はどの榜でもいさく刻んである、実は紙で用が足りることを考へると、図書館の如く数箱の書物を入れ物する所は大印を各冊に捺することは非常に不便で朱肉を多く要することを考へると不経済である。

花記は一般に小形を採用することの方がよい

如。図書館にハ本の頁の切えりを防ぐ為め、度々の変
わるく印を捺して置くも、尚更花紙
ハ小形ゝ安ゝ様ハ[illegible]
の頼家のハ切を一帖と精しく写を齎し来るゝものあり、
山陽癖未だ清へやらず、山陽の書簡を写一百く
多分刻をと海の長るとを思ハる。当年暑風の表ハ
もちの比か、家園花弁の無恙を祈り、旅中りの高集
を送げ、十五日の中秋の月を賞ちんと云へ、初めて和尚
訪仙寺を訪ひ、宝勝を賞し奉琴論公の及へ
さらしことをもを云ものゝ俗のこゝろおもしろ
くきいてゝ、十三日の日付ハ中秋二日前ひ

此月初京都字[illegible]
[illegible]滞在[illegible]
[illegible]
病躁[illegible]
家無恙且我御無恙我勇弄花
我桂園の時有表却待有願住通
且絶往来静[illegible]中秋ハ清明
[illegible]剌未全癒[illegible]
[illegible]初生美[illegible]
疾を洞ハ[illegible]
海[illegible]

不能枉道先生へ宜体御伝へ江・ミ候
右至急要及千也、飯面甚だ詩的候

八月十三日　衷

春果生拝

○ぶらく腹ごなしに散策して丸ビルの二階に在る龍香市に何があるかと探しても一向に見当らず僅かにミルドロウイッツの巴里娼婦風俗史との挿絵に興味を惹き購ひ求めた。これは巴里の志所に於ける男女の絵が多く、性の猥褻なるに近きものもあるが、巴里の女性風俗の描写は怪奇で

あつたことを古風で示してゐるものもあるので聊か参考となることもあるのである。当時得たものは特に挙ぐるほどのことでもないが、旭正秀の暮しの大津絵と京都市の紋章と、一茶の七番日記などである。大津絵を一巻に書き暮した本は絵解きの無いから車中で読んでみたが、研究が乏しくおもしろくなかつた。都市の紋章は日本の都市が自治体となつて以来の時、西洋に倣つて徽章を定めたものが百近くあつたくをさめてある。世界の大都市のも併せて収めてあるがよく工夫したと思ふ模様もあるが、多くは地名の字をあしらつたもの、又は藩主の紋を転用したものであるが、しかしてみるに智恵のない意匠ばかりである

ことを感じた。一条の白集に第中のあるけれども、こんな
往年自分も興つて尼つた、一条目的の今本に自分の
架中にも無いから買入れた。
此の間京都の便利から配本して来た複製本
八尾崎本萬葉集一冊に、従来尼崎切と唱へる
第五集と呼ぶ似て長るのに、別に名つけたのだが、
従来の第五集本十二に対する後撰の書とされてゐる
が、此書は本十六に基き、書は後撰とも云ひが誰とも云
らない。此書は仙覚本系の第五とは異つて、世に現
のんでゐる古今集と打異の跡もあつて第五研究
の上大切なものである。備中の人々の集家にあつ
たのが今は京都大学の手に帰したと云ふ。

榛原製

宗教家の手に文庫から漢籍四書各分数冊宛二
冊を贈られた。自分の嬉しく思ふのは文庫の秘籍
を云ふ稀覯書と解釈を加へた和紙もある
が、見ハまるに入手するものは。此書を偏愛する
あの手ハ忘れく後の出るまで文庫を訪問し
稀覯書から拝観を受けた場面もあるのは、最
も感謝する所である。実の所しも保存あるとの
贈られ方の故かと、文庫を共つてゐる人々に
るのに無遠慮に不平をもらしてゐるから多分共
内贈つてくるであらう。
先に石川知の金沢図書館に倣つた稀覯書の陳
列の地方不似合の調つれ方であつた。其の目的も

遺憾なく出来てゐて、文字の影跡などまで漏さず収めてあり、ファクシミレーとしては逸品の域に入つてゐる、近頃斯ることが可成り発達して来たのは大いに喜ばしいことである。

善本影譜は第十輯も出て今月第十輯を発行し、これで一巻とするらしいが総目録を添へて来た。此影本が続々（滞りなく）出版され、本輯（尚続刊し得ること）[illegible]巻を降してある。書法研究の上からは仕合せであり一福音である。

此頃又青森から今にも記念に出版した宋本御注孝経も出版され、翻刊編観書館に於て旧刊影譜も成つた、亦縁で文求堂が作つた善本影譜も完

形を売付、座振に眼の有るのだ、諸種の書模が出来たのが、繁昌を来たし自分だけ、同書座振の事だけは全く除外である。

十一月廿四日記

の世界戦争の折は欧米諸国の戦時ポスターが続々日本にも持ち来られ多くの人の目に觸れたものであるが、自分も当時感興を以つて多くのポスターを見、各国の特徴を見、其の意匠の妙にも新味あり、鼓舞的であり、激励的であることを見ても大いに感ずる所があつたが、其の当時の我国はポスターを作る者は幼稚であつたのが、欧米などの政府者でもこれ等のことをやるのに、日本政府などは一枚のポスターでも満足に作り得ぬと憤慨したことは今尚記憶

が形式である。事後漸次分私のポスターが或程の進んで来たが、何人と雖も外国と比較する事を拒びある。然る所謂日本の特殊性で実用版画美術協会が、数回の展覧を経て、初めて表意を得た。ポスターのコツを得て居ることが何者よりも表べしかつた。ポスターの絵の何か大切な事を掴まれたらしい。絵の前面の部勝で華法の力つよく到達したら格別で、これがポスターの要件であつたコツとふのも此点であるが、此の協会の仕合い先づ及ぶまじきかと思つた。日本の画家の器用さからユツさく掴めんづんく進むべき筈、自分などい実用版画美術を此時協会

樣原制

實用版画美術協會

第六回展覽會

行政ポスター創作展覽會目錄

趣旨

用の美化、美の實用化をモットーとして、吾々の日常生活起居の間に新らしき美の創造を念願し、其の美意識確立の爲、吾等は、已に、過去五年間、營々として精進を續けて來た。此の間、年一回乃至數回の展覽會、或は講演會、廣告劇、講習會等を開催して、常に前人未踏の領域を開拓しつゝ、此の新興の美術に與へられたる、美の分野の如何に無邊大、且重要であるかを啓示して來た。茲に協會第六回展として開催する、行政ポスター創作展も亦、如上の精神に立脚した、爾後に於ける會員研鑽の具體化であり、更に一歩を下したる、新部門開拓の試作發表に外ならない。

凡そ一國民の社會集團生活に於いて、その向上發展を計り、勢力の伸張を願ふならば、先づ第一に、其の全民族のより強固なる結合をこそ必要とする。結合とは、一つの偉大なる力であり、勢である、如何なる文化、如何なる國富の運行も、此の結合の力、集團の勢に和せざる限り其の隆昌發達は望まれない。されば、一國行政的機能運用に當つては、如何に巨大なる爲政家と雖此の民族結合の力を無視しては、又遂に何の業績を擧げ得やうぞ。民族のよりよき結合とは、民族各個のよりよき意思の疏通、全き相互間の理解に基くのみ。されば、民族の幸福、一國の殷盛を願ふならば、茲に爲政者と大衆は、倶に、相互の意志を十分に知り、知らしめ、傳ふ事こそ、最も偉大なる結合力を産む所以としなければならない。

吾等は、此の意味に於て、意思表示の媒體として多くの特長をもつポスターが、行政遂行の機關として、如何に偉力ある存在なるか、を知らしめ、其の旺んなる利用を慫慂せんとするものである。一方、今日迄の日本ポスター界の情勢が、理論に實際に、殆んど、産業ポスターのみに鋭鋒をむけ、ポスターの眞の特長を認め得なかつた事は、實に全日本國民の一大失念宣傳的性能の發揮即ち、思想傳達の用に、一段の重要性を認め得なかつた事は、實に全日本國民の一大失念と云はなければならない。

吾等は世界の大勢に鑑み、又日本實用美術界のパイロットとして、將來益々此種ポスターの有用なるを感じ、茲に其の草開試作發表展を劃て　世の識者に問はんとするものであるが、幸に此の運動が渦紋の一石とならば、吾等の喜びは誠に大きい。

馬匹改良ポスター　堀内治雄
高射砲献納ポスター
防火宣傳ポスター　元義雄
産業講習ポスター
防空ポスター　水谷仲吉
海外移民奬勵ポスター
選擧棄權防止ポスター　平尾武義
工場安全週間ポスター
衛生ポスター　青木利一
高射砲献納ポスター
海外移民ポスター
旅行ポスター　小金丸梅雄
納税ポスター
對滿政策ポスター　藤澤龍雄
軍國ポスター
旅客道德ポスター
交通道德ポスター　池上重雄
滿洲守備兵慰問ポスター
馬の利用ポスター
少年團結成ポスター　中山正德
健康週間ポスター

ラヂオ体操ポスター
産業講習ポスター　熊谷慶晴
簡易保險ポスター
年賀郵便ポスター　小野健次
公設質屋ポスター
國産振興ポスター　竹内力三郎
思想善導ポスター
山林保護ポスター　戸島逸郎
少年航空兵募集ポスター
非常時ポスター
國産振興ポスター　藤本健治
休育奬勵ポスター　吉川正一
軍器献納ポスター
飛行郵便ポスター　大坪重周
産業奬勵ポスター
滿洲觀光ポスター　藤本健次
合作　池戸初太郎
休育奬勵ポスター　竹内力三郎
合作　谷口健雄

護國ポスター
健康運動ポスター
兒童映画ポスター　多田北烏
樹木愛護ポスター
廣告塔試案
兒童劇ポスター

會員外出品

交通ポスター
鐵兜献納ポスター　谷口健雄
防空ポスター
防空ポスター　池戸初太郎

最も大切と思ひ、
○此度の西村無次郎氏の橋士郎と得たのもと祝宴を開いた。
西村の夫婦四家族人ずつ二百人ばかりの客。
の宴は十時頃まで続いた。十時すぎても漸やく酒人が

實用版畫美術協會

がおもしろい人物であった。西村は伊賀の山奥の人で芸者今日子
をつれて中村吉義高等学校芳沢先生一行などは学校
である。あるとき彼が芸者時代のことを話す内容
は全く学問をしたけれども学の資がないのだ、そんなものを
学校の課業を欠席することの度々あったのを
もを得ようとおもひ、当時の師匠として内ヶ崎氏
この人の法学士欠席云々とあったのを参くれの
彼は日清戦役と軍事を輸者として出征したことを
つきこの高底を出る人が其際隊長であったと京
て当時の情無涙をやつれたのいを願る再新らしかつ
た、出征中い高位が十個ばかりの本第に交られ為
を弱り、置きれこ困って的の底に典けたものの話も出

複原制

た。西村は乗馬でうく泣く出発したいの感
役であったが、出征を中つてから飽り泣かなくなれ
るとの話も出た。或る人は西村が研究に志したのも
歴史家となったのも其の出生地の伊賀がらしめ
たのだと説いた。或る人は西村は学大の審査で学位を
贈られず、こんを早稲田から得たのの何等りの名誉
でもあるが早大の名誉ともあると説いた。或るとは西村
が多方面の研究家で其説く所に創見があり文章
に特形があって常識を外さないものがあるも
亮芸者人であるからだと評した。内ヶ崎氏は先輩
だけが自分も東洋史を著はされたが其の材料となるべく
集めたのであるが、果して出来るやらやと気遣ひをされる

が、西村が死んだ心地した。自分が死ぬ心地した。西村を頼みに思って酒をと云ふた。五十嵐力は西村の博士論文の一章を研究と審査と命じた所懸を陰べる博士の家に

したと云ふた。西村は酒豪であるのに、近ごろ禁酒したと

歩へた。そのことを就て誰れも一向に頷かない。自分は

自分は西村の酒に就て語つた。自分と西村は長い交りで、西村が帝山高の教授「学生」を指導してゐる時

から交り始めて、香味の出ることを好まない。

みるが、自分は学の為に交いから、西村とは交いの交りでもなく酒の交りでもなかつた。西村が博士をかち得

たのは祝ふべき酒の交りであるが、その禁酒は私をして

一酒友を失はしめたと云ひ、それは甚だ寂しく

標原製

るのをと云ふた。高橋は西村が酒を飲べて自分

は学位を取ったのが、世が広き「の」の方二才が長き

博士となつたのを又て、お前も博士の方に成べきを

と云ふたのだ、その気持は、

は世の流に世を去つた、ども語つて今を別た。

○今度四代亮氏は良寛を研究して年来、終の良

寛二十年、修りの家四面寺に紀念碑を合て

斡旋を成就し、そんらの考の表出く著

作のあるを往来して良寛と都と同じ道を

歩くと上京して、金に北等のるを語り、あの山海美

の面より良寛や山陽を述べるのは偽んでもの。

藝術の間を往来しては良寛の禅味を思ふと同時に勤山陽の追憶を慕し得らるゝものが終に人生の一致する所を掌握した思索を凝して、

而して旅中彼んを憶ひ出づる毎に、而巨人の一致する所を掌握した思索を凝して、良寛山陽を併論するの一篇に筆を執りつゝあるこの成るの日は願くは一篇の序を無つてよこせ。

予は彼んを聴くと思ふ。良寛と山陽との比較は不倫なるに似たり、両人の性格行為一も

同じ所のないことを再思し後世の光らさることを覚す、卒然両者の同しき所を挙げて云く、両者名家の出なること同じ。

又曰く両者共に家を棄てたること同じ。

又曰く両者の放浪同じ。

又曰く両者の苦艱は此の放浪中にあつて良寛もこゝ

又修行を積み山陽も心膜を錬つて大器となる

又曰く良寛は一生寺の住職となる

又曰く山陽も一生官禄を食まず、共に人寺を軽

人の節を抗けたること同じ。云く僧すらも

説教をせず、儒者として講釋をせず、山頂すて僧
奥さま儒者として儒奥さまを同じ、云く共に待
人であつて、文藝に長じ所同じ、云く期す
る所、身後を在つて、良寛に至つて修行
を積け、山水を求め、山水に時年を送り
を勤め、死の時まで、業を積けて、其の
行跡の共の身後を期しこと同じ、云く果
して身後名彰い、年を逐ふて
益々其の道を発まること亦相同じ。
予は辛再口を衝いて、次の如く誦して云く。

如何なる似顔のりり、を抜め
ること出来る、更らに思ひ出せば、
くべきものがあるかも知れない。自分は郷が山
陽の事跡を研究したことがあるが、良寛との
比較などは常に考へたことが無い。君は流れ
良寛、山陽の踏んだ足跡を仔細に追跡
のび自分の思ひ到らざることを案ぜられ
のである。宛然其の境に入つて思を凝さねば
斯る考察の起るものでない。今更らこの
実境に入つての考察の大切を感じと

此の草稿は新井白石の著に
序し此一部合せ写るべし、別に稿をとどめるものから
新刊するべきこと存じ奉る　十月廿三日
白石
文行堂を通り高倉月岑の書肆一冊を購
ふ、寛政版に月岑の武江年表三冊あれども、
ハ[illegible]比すれば[illegible]四冊全備したるものも脱
漏多く比較すれば論異同あり、文章も同しからず
所載、若狭の[illegible]清者と[illegible]稿を
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
出版を勧むと[illegible]刊本を見るに天保九年

標原制

の[illegible]稿と[illegible]の稿[illegible]
のまとめ[illegible]。稿本は五冊[illegible]
の部は二冊[illegible]
堤[illegible]
江戸の風俗を[illegible]白眉のまとめ[illegible]月岑
の[illegible]

○北原尋常高等小学校で新らしい シガレットを考案した。それは
八面切二十本を袋に入れて、袋の表に山を描き太陽
が山に揚らんとして、落つる光りを放ち、東空にまだ
星が一つ残つてゐる表面で、烟草の銘が「暁」である
のだ。暁の星を文様としてゐる。日人が暁の日を
忘れ勝ちの思ふものの一次の烟草であるから、北原を案

比のびあらう。喫しもえると、そうして多心地のよい烟草が
「ハット」の如くきつくなく、柔らかく、こんなら
ば常用すると迚も、たきこの喫しもある、僕は二十本入
十二錢と云ふ廉價のものである。自分は毎日ラッキー、ヨ
ストライクと云ふ五十本入(一錢)の五銭利が烟草を喫
してゐるが、暁にこんな比しも迚も良がるい、且つ吸ふ似寄
つてゐる。僕は吾しくも、ラッキー一錢に一日六十銭を
拂ふが、それが二日つづくようなら、経済から考へても暁が
それの代用とそれ心一年の烟草代の経済はずいぶんへ
且つ国産品を常用することも時節柄意味
のよいことがもうへ。

○物の匂ひと云ふものは慣れつと感じの強いもの

び氣のつかんこともある位が、久しく嗅がないと、あるを久方
振りに嗅ぐと強烈の香氣を感ずるの心を持つ。氏が学つて
云ふことがある、洋行中日本の特産油を一ぱい塗りつけて
うつれのび、日本に着すると何寄りも先きに味つて見ると、
美香氣の如きものも強いのは、アウト思つたと語られた
とがある。絶對の喫煙の禁物もあるを禁煙に誰んかあ
かに禁を犯すこと加あると、看守がきつけんるのも、矢張
り同じ理由である。物を食べんくの匂ひあつて各異る
りの文まんく特色もある、男性の男性の匂ひが、女性を
ハ女性の匂ひがある、嫉妬深い女が良人の他し女と同食し
て、知らぬ顔で帰つてくると、その飛香を嗅ぎ分するのも男
性の鼻に得る匂ひがするから、移り香が証拠立てるのもあ

る。男女の性[illegible]が持つ特異の匂いが、恋愛などの関係を特つが、其の匂を嗅いで其特主を思ふの聯想であるが、匂ひと恋愛の関係のような淡泊の関係ひとく、強烈なものであつて、こんなに性慾をそそるものはないとゐんもみる。

五些の四人から愛人を求めるやうなさん、愛人の体臭あるいはシケ手を嗅ぎ嗅ぎ、あらんもうい態度をすれば、猟犬者が犯人を例えばいとまつじ女史の獄中性愛記録のようなものつもある。体臭は身体をうるおす力が密接のようであるから、其が情[illegible]の[illegible]も高めるのもであつて、男女の高事者が最も其体臭を嗅きつける筆である。随分或る人の忘れん或る民族に厳なる体臭が地上のきい刺激として或る人或る民族に表れ

複原制

んることの用れの事実である。高級草木でも、その香氣い性慾を媒介するようなものである。麝香猫が雄の陽気の臭いを嗅いで、其が雌を呼ぶ臭いであるのと同じ。花卉の香りは人間の方ひい勝手なものの方へ引つけて人間を楽ハしむる香化として長ゆけんなこんも毒を引きつけて、其の媒介を藉り、雌雄が交接することもあらう。亦如ちすして立ちて交接することもあり性慾に関係あるる相違ない。近ふの言ふ化ことの花木ハ恋を誘ふ香を持ての、其香りこそ互ひの恋をさそやく無言の技であると云ふ化が香をよく解し化語と思ふ。

○岡一十郎の樂屋の話が所々散乱されてあつて、足踏みの

ろ〜ぬもの〜であると常々云ふことがあるが、国十郎抽を
片付けることが嫌ひで、いつも弟子に自分の買いたま
ほれしておいるけれども、まごつくから掃除もまるで及ば
ぬと申げれと云ふ、偖て抽幸の蔵落の中央公論を
出して、みるのを見ると、これが果して事実で俳優は大
抵鏡量を持能として置くことであるが、国十郎は
無形着で、あの人は無果花から始め、楽屋でよく吸ふ
そして其皮をいつも鏡量の抽子に入れておくこと。化粧
の刷毛などは無施形の菓子折のボールに入れて
平氣であつたとあるが、あまりのものだ。
○西園寺公の若い時のことが巨刊の中央公論に載せて
あるのを見て、面白かりの一節を得た、西園寺公が伝後〜伝

○税関吏の実験談を読んだ人の一番面白がる話は、ものは実に厳に感ずるが、調べる税関吏も厳なる方面(本)なるいかめしい調べる方法は往々異味のあることの描写するから、一概に虚似(?)とも云はれまいもんだ偽がつくかも知れないが婦人を丸裸にしても調べることがあると云へば、可成厳な

職務である、貴婦人がもこしハとしらもと容赦がうへ、実ハ脱税を企てることの多い婦人を狙ふことがいくらもあるから、税関吏の眼力ハなかなか鋭い。もかし時ハ見損ひもあるが。折角丸裸にしても何も発見しない時ハ、婦人ミ恥しと極りのことハいとも面皮を厚くしてゐる。税関吏ハ大変長味を指ゆ探偵と似てゐる。第五感の鋭さも亦探偵と似て居る。脱税も一種の犯罪だ。第五の制裁ハ物品を没収の上罰金を課するのであるが、その罰金ハ往々数万円の巨額に上るのだから、税関吏ハ徳義上(本)犯者の氏名を公けにしないやうに、税関の記録ハ五

細工隠蔽の摘発に従事する課員から、その記録はおもしろいものである。今市書記が所持の別に税関を設けるのを録するとおおよそ左の如くである。

密輸品などの貴重品類の脱税を企てることは、特に外人を装わせて一等船客とし、自分の指や腕に変装して入の指輪を隠めて、そしてあらかじめ示し合わせて船の埠頭につく時に多くの出迎人が船に入って迎へる。その出迎人の指に指輪をもたせやって、まんまと税関を化すものがある。

彩る婦人らしい女の身分と出迎人が素晴らしく美貴品を身につけてある美人とニラムような外に調べる法はない。ある道楽息子が紙手袋三名の

榛原製

養者の出迎人たちの三ケ所の指輪をハメさせたりしたりなどは直ちに税関吏に看破されたとある。

密輸の如きは小品は身体のどこでも隠くせるから、税関吏は最も検査に困難を感じ、まるで陰ながら隠したとある。

なるほどこしまきの細工に成功の密輸品を絶ちこんだのを発見した実例があるこんな検査も税関で出来ることは多く発見する隠蔽物は文部省のと相当の地位ある紳士が隠蔽を発見されて面目を失した例はいくらもあるが、ある婦人が東を時日に入れ姙婦だと吹聴して上陸したが、秘密情報のすぐ帯を解いて見ると五度の支那織物が出

九と云ふことである。支那人などのマシナ者は陰分懐
めてみる。其の服の中又は巧妙な反物を隠して、何其の重
さを纏足の歩きつらさに托してゐるなどは巧妙の
るが、税関吏の眼を盗むまでのこと。
烟草の密輸は支那人が多くやつてゐるが、従来の記録
では神戸税関の発見した、胸と腹と合わせて三十罐
腹の方と三罐、右脇に六罐、合計三十九罐、千
九百五十本を一人の身体にくつけたのが、最多いと謂
はれてゐる。
烟草は前に一人ついて、巻烟草百本、葉巻五十
本までは無税となるものである。それ以上は三十五割の輸
入税を掛けさせる。然し一本一本の長さに就いては何の

横原製

規定もないので、普通の長さの三倍ある葉巻を
百本大きなボールに詰めて持ち込つた人があるが結局
税関では一本を三つに切つて吸ふものと認めて三合一
分けの上無税とした事がある。亦南洋物の葉巻
が神戸に長さ三尺何寸、一番太い所の周囲が七寸
と云ふ程大きな葉巻を一本持ち込つたのもあ
流石の税関吏もぶつたまげた。評定の結果これは
実際上口にくわえて吸ふ烟草と認め難いと云
ふので没収した。神戸税関の一例と巻葉
巻煙草との細さの差違は、なんと反覆して、一本が
「こんハ」どころか三本づくわえる習慣をもつてゐ

るのだ」と説明した人がいるが、矢張り一本を一本と数へ
ることは三十五割の税金を徴したと云ふ
春畫も僅か輸入されるが、学者らしい研究を目的とした
艶畫のヒルムなどを脳中もって居ると、子孫
七年の長い税関吏を苦しめる場面を今更研究
でもあるまいとやらかすのも年ごとに出来す
役奴さえ苦しむ。若い婦人がコンナものを持ち込
人は時々、調べる役人の方が却って赤面する女は
流れを恥じ、どうしてそんなものがあつたかといふ
とトボケテそれは女母から此れ上げるまでといふ例
もあると、
以上のごとき躰裁つけてゴマカス種のものは最も多い

榛原製

れどもが禁制品を箱の離法を擬して輸入
しようと自動車の各部をつめて輸入しようとピストル
を碁盤の中に仕込むして税関吏の目をくらま
しようと更に大胆な海外の各輸とすると本船が
らヨットに品を移して、荒波を冒険して敵破
つて税関吏の鼻のつかない港まで漕ぎつけること
とさらあつて、輸入せんとする品のものが市場に現
いれんが板鼻なまいのでい着破されるやうな
ことも然るとある。
税関で旅客を検査するのは一種の迷惑で
大変国民の面倒とすると一種の敵視が起る。つまり税関の悪制と
ることも、その実際は主人つまり入つてくると容易のものでちく陪

今と費用もかゝるから、輸入の方へ課税する。
貨物に対する重税を課することは、或は負担を
自分等の其の収支の実際を知りたいと思ふ。
薬剤密輸に就て記録する一例がある、或る
材木屋が外国の材木を買ひ取つて木挽をひいてゐる
と中から白粉が沢山出てくるので驚いて其筋
へ届け出ると、其の所ぢう残らず調べた結果それは密輸
であることが判明した。材木の寄せを調べて見て
もそんなものを入れたかゝはとまつて、全く材
木商の双方は無つり知らないのであるが、密輸入
者がどう巧みにカイを隠して材木を加へたの
か、その材木の輸入地のある遠洋航路の船、マー

横原製

ノの附してある材木を買ひ入れて密輸を
行つたのが行者)つて行ることが出来ないとこ
ろ、こんな内地の例はいくらでもある。
密輸は世界何れの国でも行はれ、密輸者と税関吏との
争闘は絶えずよくあるが日本も昔しから密輸の国で
例の沖貿易が大盛んな例つて行はれたことをよく思ひ
起す、勿論国禁を犯してこの事が命がけの仕事だ
つたことは今日と異なる所がない。
の拾貴の行はれやうもそのやうなものだ、
切したものがいくらもあつたのだ、暴動をそそる成
つてゐる。元禄海賊事件は密輸をつきこのもので、日本も倭寇の
密輸国であるから、実に主入つてくること無味のある問

発で、税関吏は、さきくの興味ある実験をした結果であらうの密輸者は探偵が来るのを人ひとの目を隠すと同じことをするもので、鏡石のごときものを埋めたり、靴の[illegible]との間に隠したり、人骨の毒をとる粉末にして、そんに貴重品を秘めたりする者は全く探偵が発見した証拠を秘密に為すまぎりを似てゐる。然んを嗅きつける税関吏の本能感も矢張探偵等のそれと同じく鋭いから、密輸者は探偵もこれに一種探偵譚が起すの[illegible]人の[illegible]を意きへると税関の油役は一種の投誠を有するものでなければ職務が勤まらない譚だ。第一密輸の法も理科的の

榛原製

ある傾向もあるから、税関に科学者を置く必要があるれおもふ。密輸を看破する為めばかりでなく、例へば羊毛と云ふやうなものの実十七階級があつて其の値が甚だしく違ふ。然れども換別する者が動物学者でなくるから、科学的の面と胡麻化さんとする者が多い。矢張り科学的の看破の法が無ければならぬ。現在内服で入れた呆れ薬を人造絹糸を密輸の見線でも看破する法などは既に工夫されてゐる。理学の進歩する他の隠蔽のものを発見出来る。例へば立体分析のやうなことを或いろいろ考へるのもむだでない。レントゲン式の照度鏡の税関に入りつけるのも遠い

将来であるまへ

税関吏が若い男性であつて見もするを女性を別室に伴れ身体検査同様のことをするのは甚おかしることと云はばおかしなことだ。女性が別会す隠蔽者であるのは、真逆に女性だから見ぬふりすであらうとの待もあるので女性が隠すことするので隠蔽物が女性向のものでもあるからだ。女性の秘部を掩ふふんどしまで税関吏の手が及ぶまいとこれを織型の女らしい思ふてそこに隠すことが即ち秘部まで生さすことになるのである。若しの関所役めでは別な意味に於て女人に親しそれ特に尊重であつたが女性を調べるまへ見め

であつたら。女囚などの身体検査する女性が出やり、すべて女性の肉体は女性にあらざれば見得ないこととなつてゐるのに、税関では男子殊に若い男子が其役をつとめるのは、鋭い検査は若い男子に與へねばならぬ、ひらでもあるか、男性と同じ能力があれば女の税関吏を用ゐる方がよいのに恐らく後には女を立派にならせることになるであらう。日本人は女性に親しあまり遠慮をしないが、アメリかのやうな女の威張る国に日本の税関吏のやうな検査を高慢婦人にすることが出来ようか、恐らく不可能であらう。アメリカと異なり婦人に公徳がならず待つてゐるとも思はれぬ。内証はひどいものだとも、

少へとみる。唯だ大国ゝ之を恐れるだけのことで税法を胡麻化して脱税を図らんとする心術と為り、若しこれを発覚すると恥辱の為堪がたいことをやつて、名誉をメチヤクチヤにすることがある。税を免るることは犯則ひのあるが、露顕を避けるものもそれ自分の物を隠すのであるから、罪は軽いが、係り役人の検査まむさんで隠蔽が暴露したとすると、如何の人の見方は第引びもしたかのめく感まるから其人の名誉を傷ることは世間の名誉を重んずるものは危道を踏んびはちゝんが、若しそれ資産家がとうかすると武第に脱税を図り、それを利用としてみる世の中

標原制

では税をさまむ見るいことと思はないのも強ち間はんとせない。偖ては今の物を隠蔽して税関吏の目をかすめたとて、それを見逃さいことは飽り大人気のない仕業と云はねばならぬ。世人を後世も計意的に大きな便宜のあるとは隠蔽することをインテキと称しても其の脱税が武第なることは疑ひない。それ等の後ろ暗くやるよりかくるが大体旅客が身廻りの品を隠すのと大同小異で税関の収入を大きな影響を及ぼすものとなるべきもの、それらも税関吏を用ひ始めるものの、大審判である。若しすると武士道まで大仕掛けの冒険的なやるとのが

ある、そんことを容数の出来ないことが、祝典の特別
を凝すべきは北方面のある

○金澤文庫長関靖が語られを来れから帝国ミュ
出で、始しに。関は金澤文庫印の次前次後と新
と金を関心不かあつたが、事は格別のものである。金
体誰れかがこんなことを言ひ出してから、二種の印のあ
るやうな異れもあるが、関は就て次ぎに金澤文
庫は生徒の為に羅つたことが無いと言ふのみならず、文庫
印は形式こそ異つてゐるがさまざま異つたのがあ
つて、西園寺の為に北条氏が押したのも共通のあると
言ふ。実は次回前生後をどこまでもあるひ
のである。本を長年まで見て居る時分の場合始めてある

いし、たまたま印する異なるものがあるか
ら、新しい研究を要するものと思ふ。
自分は関を新と文庫に関し種々のことを聞いた。関の種
類では、現在文庫を管理する国書は大義経をこめて
約壹萬近くあるが、長い百と数も沢山と尾も
あるものを追々調べて見ると、二千巻は既に平安朝
初めのものである。家康が文庫を寄せて文庫（豆いと
のは今回書寄と為てあるが、前田侯爵の為
の旧一部のみくらい。）
止まるまい。文庫の印の全部をあらはすのは今と
なっては除のするのがいっ千宮文の家を以て番
号とした形跡もあるから、元寛した頃の為書は恐

く二番もあつたと想像される、当時二番の巻もんちの
く豊富のものである。
幕府いらい不文律を基本とした因者を調べさせたと
あるかくらいあん堅を幕府へ納まつたのであらう
杉重長い津田五郎兵衛を基本としたので現れ
津田の四名のある書目のうつけが存してゐるを
うつて、その書目の内1のものは前田家のあるものもあ
るとうくい前田家のものもあるもの。
或許かあるとえへ話家に敬乱してゐるしのいかゞ
くらい、幕府時代ひも金印文庫本は好書家の
会指を動かしたものだ、手鑑式に仕巻きを剪刻
したものいかゞうずある。

模原製

成の話しを聞くと杉重長時代に寺もお寺を崇重
であつたのでいくら前田家の待求でも貸すことす
ら容易易に承引しなかつたことが文書の上に存
してゐると云てゐた。称名寺のお四個寺の承諾を
得ることけん貸すことが出来ぬといつて前田家も
いろ〳〵手を尽した様子が見へる。従来学者も寺の人に
見せるこゝろ比べあい交換の類で、それが特れ二つもあ
つて充ち満てゐる。それ今数出現中いてあるかすべて
が鈴会時代の文献で紙の貴重なる時代から、大
概文書と仕立てかゝ書かれてあるが、野時代他名
のたいん比人の手書が愛るもとあつて、中すべ的こゝ重
要の書であることもあるとも交つてあり、連歌などの書物

もあつて、其の低者の未だ判然しないが「ト」の一字を寫し此通歌のかきさの「ト」と云ふのが表し「ト」和歌の如でもあつたとすると、実に貴重のものとなる。文庫の歴史を語るものが、此文書に含まれてゐるのは研究上大切で、其が今まで世に一も散乱せず、整然と保存されたのは何者の仕合せであつたか。（十一月三十日）

○紙の尤も古いもの　パピラスで埃及時代に蒲を材料として製したものである。今其の存してゐるのは、皆墓中に納めたものとなつて迄刊の古書籍墓誌に奥田抱生の記するところである。

紙といふても、今の艸木布帛を原料とした物ばかりではない。羊皮、竹木、艸、泥土絹帛等種々のものがある。

紙の最古のもは埃及のパピラスであるが、十五尺もある蒲の一種で、一部は之を紙に製し、一部は船材に用ひ、根は薪に用ひ、若芽は食料に供したのである。餘りに使用の途が多い故か、久しく此種は埃及に滅絶して、南亞非利及希臘のクリート島には今尚ほ存在する樣である。紙に製するには楮の樣な手數がなく、薄く皮を剝ぎ何枚も合はせて壓迫して之を乾燥し直に使用するのである。之は天與の佳品であつて紙中の王である。六千年も前から使用せられ、此紙に宗教の經文物語歴史抔が多くは彩畫入にて認められ、今日夥多存在してパピラスと稱せられて居る。パピラスの語が一轉して西洋のペーパー（紙）となつたのを見ても、其起原の舊い事が分るであらう。其繪卷及書卷の重なるものは

英國博物館のアッボットパピラス
アムヘロスト公のアムヘルストパピラス
英博のアナスタシパピラス
ベルリンにある有名なる繪卷兄弟物語
藥法を記したるエベレスパピラス
咒法を記したるハリスパピラス
オルビネーパピラス卽英博の兄弟物語
プリスパピラス
英博の算法の記卽リンドパピラス
英博のサリエルパピラス
カイロ博物館のセトナ物語（又サトミ）
ヘルミテーヂ蒐集中の破船物語
埃及王世代を記せるチユーリンパピラス

等が最も著名なるものである。

又埃及古代身分ある人々が死去に際し、往生經卽ち西洋人の所謂死人書（Book of Dead）は（Coming Forth by Day）と譯するのが本意で、卽心成佛と云ふ意味である、之を往生經と云ふ方が原語に近いのである。此經はピラミッド内にも刻してある、又パピラスとして長短一ならず夥多存在して居るのである。夫故ベルリンへ諸國の學者が集つて來て、此經の順序を定め之を結集したのをブック・オブ・デッドと稱して居るのである。

今一つテーベの墳墓中より集めたのも、矢張ブック・オブ・デッドと稱して英國のウオルス、ブッヂによりて發刊せられて居る。右往生經はパピラス中に於て多きを占め、伊多利のベルゾニは專ら以上の諸パピラス蒐集に對してあらゆる暴擧をも敢てした程であつた。又パピラス中に、希臘時代民間の往復文書等がある。之も一見の價のあるものである。

又埃及の内コプトは早く耶蘇教を奉じ、其經文のパピラスがある。之は新舊譯以外、頗る參考となるべきものと稱されて居る。以上は皆パピラスに認められたる書畫卷で、歴代大吏の手に依つて記せられ立派に跋文抔も添ふて居る。都ての事が世界的になつた今日の場合、パピラスの鑑定も重荷に小附けの一つとせねばならぬ。

○地区文義を奉祝び左図次を抜き産法会を開いた
が、図十印の印象に付て問ふものがあつて、えつ説し
た図次の義が意らしい。

私の子供の時ですからどういふこともあつまもんだ
が私千松をしまして此時女の人は非常な汗をか
く人でして抱かんで居つて、顔く汗ばかり流
さんと居つたのを今も思ひ出します。そんから
五四六四の時ばかりしかし大徳寺といふ芝居があ
りまして三法師のとこふ子供があります。人さんは
抱かんで居る役です。さうして柴田と河尻
して出ります、まことに子供の時分ですから、
私い寝そしまつたんです。その中に柴田が人さん

樣原製

と喧嘩して居ります。そこで人さんは抱えかゝらうと
まして私が出ります。その時「憎つくきこの爺く控
へおろう」といふ基督教がありまして、えんが為め
柴田が人さんにかゝんとして、えんを寝てしまつた
で、私の後ろに図十印の子で付添ひの者が
ありて、こんな子供あるうの者がやるんですが、とい
つが大きな声を出して私の代理を勤めて く
れた。さんで目が覚めたといふやうなことがあ
りました。

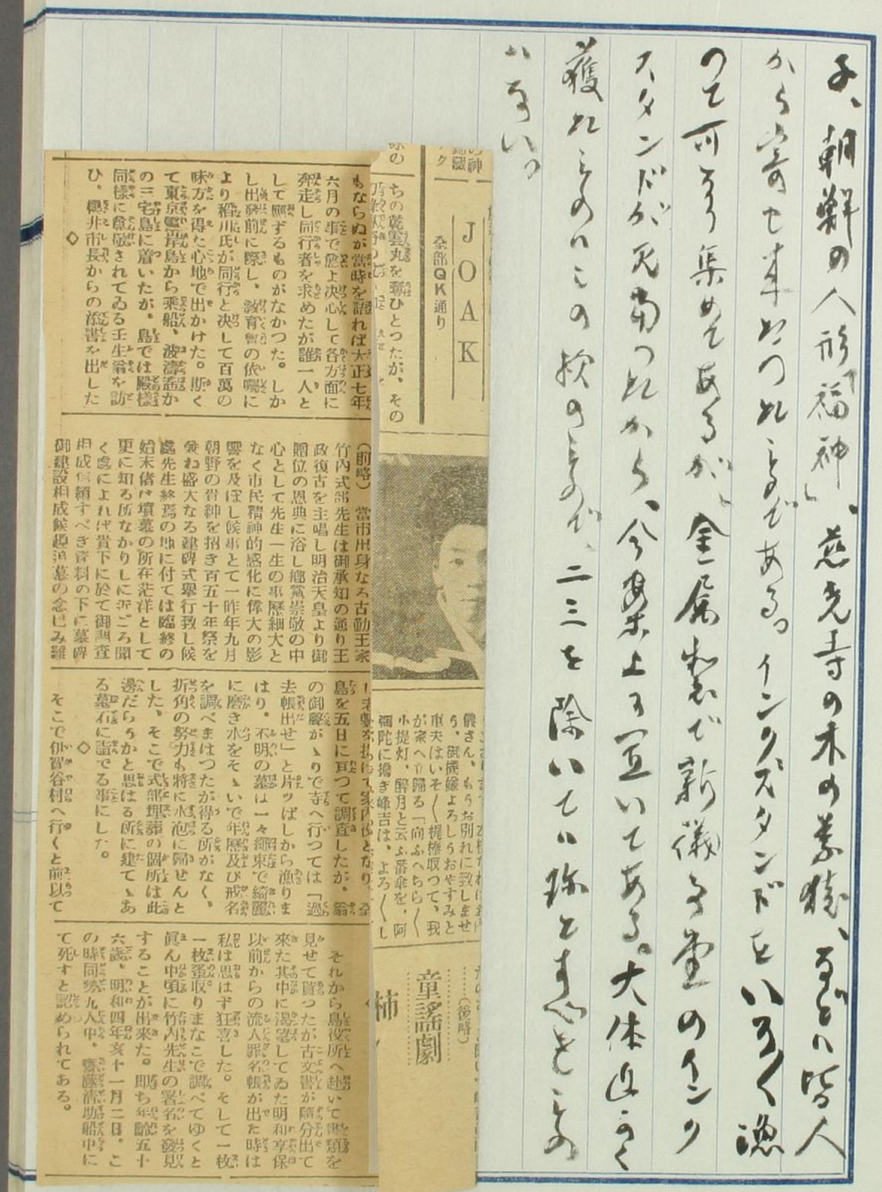
○小品を置く棚が完満して器が折り重ろう鉢地を為ためや
うにと、好りに混亂して見栄がないので今まで手間りのあ

を入れて置いた棚の中のものを外へ移し、その棚を二百路ばかりを突んだ地の棚に移すと、満ちた、保し今まで埋没しておく
もの、そうそうたるものが漸やく存在を現ハして、元業のある
やうになった。
小品の内でまだも満たぬものが少からずあるが、此等を陳列するに
特別の架を要するが、まづ二段がつかめ、いろ〳〵の匣に入れて置
可成便に折り合ふやうに取捨もしたが、なかなか仕末がつかず、未
整理のまく仕舞ふんであるものが少からぬ。帛さ枝ばかりあ
やうなものに、架に釘でも打つて、掛けんがよいのだが、まだ
ものを手の及んでゐるに。
小品の手を減ぜんがためにまづ北欧の人から、制作
心の見本を求るか、其の借用を請ひて、それを模し出す

樣原製

意味の面倒を感じた。時々は別人と採集を競しれやうな形
で一向手を入らぬ。唯だ折々人から寄せ来るものもあつて
中々に趣味を感ずるやうなものある。数多の物を手に
入れたまるを会いても、例のごとく直獲のまを奉
けて見ると、牙彫りの庶子人形などの形色も面白く特徴
があり、頃き陶器を容れる器が、帽子屋が取り外すやう
なものも、その陶器をレヤクルもがついてゐる。唐
乾隆年製の字が刻されてある。偏青磁六角の壺も珍
らんに花盛りの植物の枝を金色の手つきの葉の装し、
是れも手の込んだ特別のものなり。彫がよつて、ルビーのごとき紅石
がいくつも嵌入してある。桃の斑のある玉とも見らるべきものなどが
まだ数点がつゝある。初めは洋品かと思つたが、桃か玉らしいので

文部省令と刊してある。此のやうなものあるまで、第十四条のものあるから敢て求めるものが、話としてある。古物作に第十五条のものあるから、廃代のものかと思ふ。完備のある一体を得た、体制のよいものである。ある日デパートで行つたらいくつも投かまるるく投すると、陶器の茶碗、有田焼の鍋の箸置、マッチケース、外国婦人の首、木彫のシガレット、ケース、その他の特産物を得た。こんな物は特産物を興味を惹くものは、外国婦人の首やマッチケースなどが、外国婦人の目を見張らせやすく出来るものと思はれるからである。箸置や数多い、小品中なる銀の皿などは盛るまい物品あるから取上げる気が起るのである。各地の産物は、特産物人形の類は、庭内産の子宝いづめ



よ、朝鮮の人形福神、慈光寺の木の美形、などは人から喜ばれるものである。インクスタンドをいろく漁つて可なり集めてあるが、金属製で新機軸の金のインクスタンドが死蔵つたから、今度集上る直いてある。大体以上の獲れたものはこの校のもの、二三を除いて孫とまごとあ

JOAK
全部QK通り

ちの黄雲丸を新ひとつたが、その

童話劇
柿

（前略）

もならぬが當時を調れば大正七年六月の事で慶上決心して各方面に発起し同行者を求めたが誰一人として賛ずるものがなかつた。しかし相模丸に際し、教育費の使嗾により稲川氏が同行と決して百萬の味方を得た心地で出かけた。即くて東京電報局から乗船、波濤遥かの三宅島に着いたが、島では厳重同様に歓迎されてゐる壬生翁を訪ひ、櫻井市長からの感謝を出した

（前略）當市出身なる古勤王家竹内式部先生は御承知の通り王政復古を主唱し明治天皇より御贈位の恩典に浴し愛国崇敬の中心として先生一生の事歴絢大となく市民精神的感化に偉大の影響を及ぼし候事として一昨年九月朝野の賛神を招き百五十年祭を営ね盛大なる記碑式挙行致し候處先生終焉の地に付ては臨終の始末偖は墳墓の所在茫洋として更に知る所なかりしに近ごろ聞く處によれば貴下に於て御調査相成信頼すべき資料の下に墓碑御建設相成候趣追慕の念ひみ難

それから島役所へ赴いて書類を見せて貰つたが古文書が隠分出て來た其中に漂流してゐた明和享保以前からの流人記名帳が出た時は私は思はず狂喜した。そして一枚一枚筆取りまなこで調べてゆくと眞ん中頃に竹内先生の署名を認めることが出來た。即ち年齢五十六歳、明和四年亥十一月二日。この時同勢九人中、藤蔵、藤助、時中にて死すと認められてある。

そこで仰置谷村へ行くと面見て

そこで式部先生の墓碑は大正七年六月の事で慶上決心して各方面に発起し同行者を求めたが誰一人として賛ずるものがなかつた。しかし相模丸に際し、教育費の使嗾により稲川氏が同行と決して百萬の味方を得た心地で出かけた。即くて東京電報局から乗船、波濤遥かの三宅島に着いたが、島では厳重同様に歓迎されてゐる壬生翁を訪ひ、櫻井市長からの感謝を出した

◇

そこで仰置谷村へ行くと面見て

模原製

文部省令と刊してみる。此のやうなものが第四期の教科書として採用せられたのである。古物作に第四期の教科書を多くあるから敢て求めるものがあるかも知れぬ。

庚午のものかと思ふ光背のある一体を得た。体制のよいものである。ある日デパートで行つたら、陶器の茶碗、有田物の鍋の箸置、マッチケース、外国婦人の首、木彫のシガレット、ケース、などを得た。こんな新しい物を得るのは、外国婦人の首やマッチ、ケースやシガレットケースなどが、外国人の目を惹くやうに出来てゐて日本の工芸の進歩が実現がいんるからである。箸置の数多い、小品中の銀の皿などは盛つてある。取上げる気が起つのである。各地の産物は、特に、陶器の名産いづめ

三宅島へ渡航（上）

續古老雑話（豆）　鏡淵生

水道町　佐藤貞三郎（七十歳）

私が竹内式部先生埋骨の地たる三宅島へ赴いたのはまだ二月昔とあならぬが當時を顧れば大正七年六月の事で殿上堺心して各方面に奔走し同行者を求めたが誰一人として賛成するものがなかつた。しかし出発前に際し、教育界の依嘱により稲川氏が同行と決して百萬の味方を得た心地で出かけた。所が東京霞ヶ関駅から乗船、波濤を冒かの三宅島に着いたが、駅では驚嘆同様に歓迎されてゐる壬生翁を訪ひ、櫻井市長からの感書を出した

その文面は即ち左の如きものであつた。

（前略）常市出身なる古勤王家竹内式部先生は御承知の通り王政復古を主唱し明治天皇より御贈位の恩典に浴し億萬崇敬の中心として先生一生の事歴細大となく市民精神的感化に偉大の影響を及ぼし候事として一昨年九月朝野の貴紳を招き百五十年祭を営ね盛大なる建碑式挙行致し候處先生終焉の地に付ては臨終の始末儀は墳墓の所在茫洋として更に知る所なかりしに過ごろ聞く處によれば貴下に於て御調査相成信頼すべき資料の下に墓碑御建設相成候趣浪墓の念已み難く仍ち新潟県園長佐藤貞三郎氏護島親しく展墓の上補殿の事項取調候事に相成候間参趣の節は御延見被成度此段依頼旁得貴意候頓首

大正十年六月十三日　新潟市長　櫻井市作

三宅島壬生威次郎殿

◇

此書状を見て壬生翁は大に同情し老軀を提げて案内役となり、翌日を五日に亘つて調査したが、翁の御厳がゝりで寺へ行つては「過去帳出せ」と片ッぱしから渋りまはり。不明の墓は一々鋼棒で掘り出し、墓に刻まれたる戒名を調べまはつたが得る所がなく、折角の努力も将に水泡に帰せんとした。そこで式部埋葬の個所は此湯だらうかと思はる所に建てゝある墓石に記してる事にした。

◇

そこで伊豆谷村へ行くと前以て急に草を採つた跡が見える。高さ四尺位で「明正四位竹内式部墓」とあつたのを見て、嗚呼わが郷土の偉人竹内先生、郷里の何人からも弔はれず英霊遂に長星霜を過されたかと感慨胸に満ちて暫くは唖然としてゐたが。やがて墓石の砂を白紙に包んで持ち帰る事にした

◇

それから島役所へ赴いて戸籍を見せて貰つたが古文書が隠分出て来た其中に渇望してゐた明和享保以前からの流人罪名帳が出た時は私は思はず狂喜した。そして一枚一枚筆取りまなこで調べてゆくと眞ん中頃に竹内先生の署名を發見することが出来た。即ち年齢五十六歳。明和四年癸亥十一月二日。この時同僚九人中。藤蔵流罪船中にて死すと記められてある。

横原製

新…隨…續古老雜話（四）鏡潟生
潟…筆…

三宅島へ渡航（下）

水道町　佐藤貞三郎（七十歳）

◇流人部屋の中に式部先生の名を發見した私は大いに喜び、さて改まつてこの寫眞の一枚だけを是非土産に持ち歸りたいから懇願してほしいと島司に懇願したが頑として聞き入れずこれは權外不出であると答へるので、止むなく諦めては見たものゝ、しかし私は熱誠をこめて「竹内先生がこの島の土となつたことは御記めですか」といふと島司は「承知してゐる」と答へたので、「然らば何處の場所が埋葬されたか明してをらぬとしてもこの島のどこかの土になつてゐることが事實とすれば此地に先生の靈が籠つてゐるではありませんか」と詰め寄つたが、島司は全体が墓です、世界一の墓です。ところが我新潟には何一つないから此寫眞の先生の墓に押のある一片紙だけ譲つてくれられたいふのである。

◇しかしそれでも聽ぜぬので、最早總体總命であると私は深く覺悟する所あつて決然として言ひ放つた、曰く私は六十歳に垂んとして遠々この島を墓ふて來たのに、無益にして去るには忍びぬが、茲に至れば千古に遺憾を殘して去ります。感激涙せ下つて悄然其處を辭さうとすると傍らにゐた加藤、池田兩氏が隨分同情して私に賊意を受けてゐたものと見える。

◇農が意外にも「然らば上げませう」と快然として承諾してくれ、御懇で私は命拾ひをした氣がした賜くて「同窓のもの、分まで御持ちなさい」と言つて呉れた、これは先生位下同船の流人八名の名前が内山紙半枚に列記してあるからだが、私は他の不埒な犯罪人と先生を一しよにするのは感心を失するから先生の分だけで宜しいと答へ、一同立會の上、必要な部分だけ町家に切り抜いた。

◇賜くて目的を達したので墓地の一包みと寫押を大切に懐中し鈴々宿所へ引上げたが、一週間に一度しか來ぬ船が四時半出帆すると

いふので土産物も買ふ遑なく、伊賀谷村から乘船して東京もそこそこに歸濱し、旅裝のまゝで市役所の市長室に事の顛末を報告したのである。

（註）佐藤翁の投じられた此一石の波紋は大きかつた。予も一昨年中村市長、藤田書記、須賀公友、中野毎日、北上毎夕の三記者、其他北村女史、松山、古山諸氏數十名の一拘會員と遙かに三宅島へ渡航して祭典を執行した主生翁はめ島司、村長等と會らずも偉人の遺骨を發見し直ちに分骨の承諾を得て歸濱したが今やそれが實現して偉人の靈を永く鎮土に慰めることが出來た

○久方振り鉄筆に向ひて引筆する、毎郵を待くず、往年の義血を吸り出して淡々、馬琴の史伝を閲する比歳冒海行の一節あり、元亨へず淡々、文政化から鉄冒の名地と流行したことが書きあらはしてある、一家

一人殘らず傳染まんど大方の時疫ものが流行す、隨分多くの人々を驚かせるものもあるが、死亡者のなかつたことは、何風邪と云ふ流行するごとれ、何風邪と云ふとも名を附するが弘人と例とあつて、琉球人が来航する毎に風かぜやると云ふて琉球風と名つけ、流行歌かく名をつけ、どうもの流行がはやり歌やはやりもの感冒が流行する年まで、はやり風邪、あるのはやり歌をあるうとしてあること、八月の時のはやり、江戸そかまやあるとふかう比べ流行し

くもらいくもれ、彩雲山、はんにとそ、お江戸がえる

榛原製

ぢやあるまいし、コチヤかまやもの
名高き国十郎改めて海老蔵になる花の成田屋の株
コチヤかまやもの
コンナ歌が流行したが、今日の風潮の中にも以下の男女が
多いが、時代柄なので人も歌のことをかまはずして金くと
のも一言の比喩、意味深い笑ふべき事の志ひだりとい馬琴の
故事のつけてある。江戸の庶民の流行の為め戦争を平
仕舞もしたことがあり、窮民を施米をしたこともあ
ると聞いてある。時代柄で風を為すがつくと云ふから
今日でも国家の重大事を手古摺つてゐるから驚かされる
とでも云へべきかを一笑する、但し全分の自分のかつれ風
い流行性のものでハない。コチヤかまやもので金つかる

やい疑問だから、時代柄ハ大変が外出と入浴ハ又会しを
大事をこれのものである。
○新井白蛾の牛馬問は蘭の後輩のものが又くもある
事実だと云ふからおもしろい
市が侵数に字母松与をいくら驚ます、一とせ
夏鍼を兼べ器とられた蛾鍼を行失ず、月ゝと
も殺に不得しも止めず、翌年の夏の始め、徒然
して居られた、縁の上に血滴り義、不思議なる
うめ元る所に、大きな蛇、義を死にける地面を
害にする、蛇を捉へて年と此家に巣をなる
と居も、此蛇の為に卵を産んで生育するな
ゝしに、去年の鍼を此蛇の所へ今年終

に敵をとり、ぬ。おのづから毛孔まで、是余
既しく少く所なり
○身体を苦痛を受へるとなつてまんが一概に疾患といふ
い、婦姙あんどゝ云ふあい果しても病患であるが、時に其病も
あり、合蜆が円滑に行かぬと、死産に陥ることもあるもの
全体に性交接の結果孕むのであつて、その受胎を誰も
心病と罹つたとゝふあいあるが。凡業日に来ることゝお氣
の毒といふいず、お日出とうと祝日するが常び姙娠婦人
心分娩を乗ぬる姙しい氣が漲つてゐる。十ヶ月間身重
の苦しみがあつても、敢て人に訴へるものゝ、お日出たいからび
ある。個様に病を供ふ病のあるとする苦病まるもの
もの、(ほる)や症徴を善ち

榛原製

疾患とを就ていふのと、別段の名があつてゐいのもあ
るが、それは、支那の流石に命名が巧又で
ある。ち木昆陽は婦科百致全書に「十月不生、臨
産腹痛或止不定、名曰寄病」とあるのを引き
兼病といふ名付けりと云ふのである、陣産はしくく
に胎児が動きこうく病むのを、柴天的に非病患
的に「寄」の字を選んでおもしろ味がある。
寄生姙婦の心地は苦痛を繋みるとき味つてゐる
ハどから、寄の字が面つてゐるのだ
道春の梅村載筆に、産後の血しぶりに男茎を用ゐと
ふこと秘事也、或る異人を訪ふる時に、外科来りて
宦官をもつて、彼の陰茎を截り、さる秘法あつて産

後の金瘡の用也と云へり。田舎の婆抔の説も亦
○かの信州雞けのごとき、旦くく記し置く。
昔の実験多き醫の説に子の生まるゝのは、自然に生んだ
のだ、産むのだるい。薬を以て大便を通ずるとは大いに異る、
世俗よく云ふことなれど、産は天道授る所にまかせ
お産疑いなしと、何ぞ其通りゝ、臨月ともなると立ぐせ
産婆をつけ置きなりの苦しく痛めば、産婆が揉んだり
するのは、自然に憐る措置で、こんが為めに却つて
難産となることあり、況んや分娩を早めんが為めに脱出
を壓迫することきい危険の甚だいとのだ、産婆は分
娩を急ついに臨み初めて招くべきことの如き、あらかじめ
招きつけくはゝ却つてよくなかへ。産婆が来れば姙婦

榛原製

はやはり分娩と心得て自ら無理をすることもあつて
難産となることがあると云ふのである。産婆を頼む
の必要もない多くの人に難産のないのは自然の任す
かくなどと云ふのも一理あるやうに思ふ。
○二三の来る郷の羅つて卵を出来あぐ寝室に入つて
痛みを覚えい時由岡に居た時のことを想ひ出し、種々の
ことを頭に浮べて見ると、端なくも日課として筑紫の
四明堂塙先生を訪ひ、漢学の教を受けた時のことな
どが、想い出さるゝのは其時自分は十二三歳で母方の岳村
候今の中條町の家となりても安偶を偶々してゐた。
○筑紫の西条を一里許離れた演手なる小郷
後で有つた。毎日二里の道を往復歩くことが日課で、一人の連れ

無つた。勿論其は人力車などが、あも無く振り飯を捨
へて見ぬ所のない比なびあつた。途中の三沢の道路が
あつたが、あと捷路を求めて、田圃の小路を辿るやうな
ものの日に。一里の道を往くあもあるくの一刻を過
度のことで、或る時は悲痛を案じながら、やつと一時が
經つたこともあつた。熱海を出きづまつて、袖す
る入れてある合英を途中で繰ることも
もあつたのその時の別と祈る的の景色もない時びあつ
たから、多くの場合板おすもたくするボンやり
と母一里の道を往復した。毎日同一道を繰返すのと
から、環境の変化もなく、何の人の興も覚えなかつた。
今ようて當時の事を追憶して見ると、田園の風

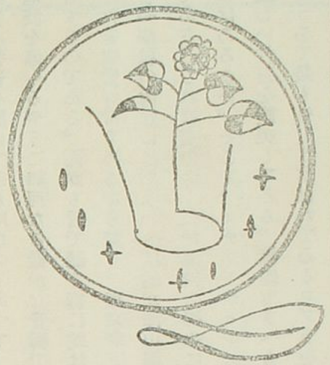
景はなるべく枝がなつたに思ひ出さんる。丁度今
頃の初冬、昔の通りの田畝の間を通つて山路を急
く時などすへ、少年なりし田園の風景の森しみ
る打入れた。満目皆の田び稲は既に刈り取られ、その切
り株から四五寸の　が出てみる。稲の馬草を農
夫が刈りかけた鎌を刈り取るのを待ちながら見た。道
端を流れてゐる用水は溢れて計りの濁つて、矢の
如く流れ、拍動から流れの彩が再び入
る。蒙々たる蒙は田かあつて、見かいつも道の陽りの
日標となるのであの田を低へんが居村が近いと勇気
がついたりもし居る田舎の業をん稚かれ遠し雖い一日の風
陽である。途中まへ三々五々の人家もあつて、遠くから

気を望もと、村全部を見んとの樹木が悉く黄葉し
て、寂莫の風味を一層ますます、途上の村を過ぎることも
あるが、農夫が馬を洗つてゐるを、村童が家鴨を追ひ
入れようの犬が戯れてゐるなどが大根や蔬菜を洗ひ清め
ある。湖の野菊こせるどがよ
なりしてゐるのを見ると、田舎の長閑さ毎々見るのと
ハ違つて、古い葉と白い根が丸出しでやうす見くも、田
アヽ青の龍と彩を為しなくて。柿の樹が既に葉を脱
して僅かに赤い実を二つ三つ残してゐるのが黄葉の
間に見へ、畠の一角に残菊の霜に傲
てゐるのが、何となく一
種の風趣を覚える。楽しかも初めて来んを淋さかんを、

横原製

人が毎の見んが反達のやうな気もして寂をかけを入れなく
もなる。時々は猟銃を出遣つて遣を失してゐるのも
緊張もする、晩秋がどこからとなく忍こへて春を蔑
然と思ふ事多ハ何とも云へない味がある。今更思へば無邪
気な昔の頃をんを思ふ。ナンナ風景を今く開却して今
は指も遠隔する

十一月末の記



怪奇刺青綺譚

白水陸郎

◇

アメリカ公使タウンセン・ハリスが、下田港柿崎の玉泉寺に在つた頃、彼は、下田港の多右衛門と云ふ櫻ぼかしの名人から、とてもグロな惡魔の顏を彫つてもらつたといふ事實から判斷しても、十一谷義三郎などの書いたハリスと本物のハリスとは大へん人柄がちがつてくる。

十一谷の書いたハリスは、志操堅固で、清教徒みたい老人であつたやうだが、本物のハリスは、アメリカ人通有の好色で、高慢で、とても手のつけられぬ男であつた。唐人お吉を世に紹介した村松春水も「日本へ來るまでは曾て紅裙のあたゝかさをしらぬ、枯淡の清生活の人」と純良誠實な性行を稱揚してゐるが、實際は通譯兼秘書のヘンリ・ヒウスケンの好色におくれをとらぬ强か者であつた。したがつて、當時の紅毛人の常習だつた女湯を覗き廻つたり、通行の女にいやらしい言葉をかけたり、酒も呑んだり、大いに精力を濫費したものである。だからこそ、櫻ぼかしの名人に賴んで、皺肌に刺青をしたりする大へんな清教徒だつたのだ。

かように、好色獵奇の人ハリスが、娼婦に飽いて日本娘——つまり處女に食指を動かしたのは、やはり紅毛人の誰しもの慾望であつて、彼が下田奉行に處女の周旋を交渉したが、奉行は處女で洋妾になる女を百方探し廻つたが希望者が無く、千方盡きて藝者上りのお吉を處女だと稱してハリスの侍妾に差出したのである。

ところが、海千山千のハリスが、同じく海千山千のお吉を何で處女と信じよう。いくばくもなく僞處女たることがバレて、二月ほどで追ひ出されてしまつた。お吉もまた清教徒面したハリスが、おそろしい惡魔の刺青をしてゐて、高慢で、嫉妬心が深いのですつかり紅毛人に幻滅の悲哀をかんじたといふ次第、……これが、實說の唐人お吉なのであるが、このまゝ小說にしたんでは讀者が承知しない。そこで美しくも哀しい開國の犧牲者としてお吉を美化し、さらにハリスを清教徒らしく粉飾したのである。

何よりも、ハリスの人となりは、彼の刺青が雄辯に物語つてゐる。ハリスの湯屋覗きや、娼婦漁りは、隱れもしない事實であるが、彼の刺青の一事を知つてゐるものは多くないやうである。

◇

いつたい、外國人は、日本の刺青に多大の好奇を寄せたものらしい。長崎開港以來日本へ來遊する外國人は、多く刺青を施すを無上の興味とした。したがつて、長崎、横濱、下田、函館など〻いふ外國船舶の出入する港町には、必ず刺青師の名手が住むでゐたものである。長崎の吉田源、横濱の彫辰、下田の多右衛門などはなかでも有名であつた。そして、それらの刺青師は、日本人よりも外國人により知られてゐたといふのも面白い

横濱には、彫辰のほかに彫千代といふ名人が居た。彼は、外國船が入ると、いつも異人館へ忍んで行つて高價な彫賃を稼いたが、外人からは毎月千圓ほども稼いだといふはなしであるが、名人氣質の男で、そんな惡錢はもとより身に着かず、年中すつからかんであつた。彼の得意とするものは鬼神お松、姐妃のお百、生首お仙といつた毒婦物であつた。

これは秘話中の秘話であるが、有名な大津事件で日本に來遊中津田三造のために狙擊された露國皇太子も、長崎の吉田源を側近く召して、ひそかに兩腕に丸龍を彫らしたといふし、英國のコンノート殿下も來朝中、横濱で、ひそかに刺青師を召して、月桂樹に男女の首を彫らしたといふことである。そのとき奉仕したのが彫辰老人であつた。

このやうに、高貴の人々までがグロを愛して日本の刺青にあこがれ、みづからの肌をけがしたのであるから、他はおして知るべしである。

◇

刺青は、小說水滸傳の飜譯によつて支那から日本へ渡つたも

のであるといはれる。殊に、葛飾北齋が水滸傳の口繪や挿繪に魯智深や花和尚九紋龍を華麗な彩色で描いてから、大いに流行し俠客、博徒、火消、町奴などで刺青をせぬものは殆どなかつた。

天保十二辛丑年に、幕府はこれを禁止したが、當局の彈壓ぐらゐで消滅するはずはなく、天保、弘化、嘉永、文久の刺青流行は、その極致だつた。れいの松平出羽守や、名奉行遠山左衛門尉、浮世繪師豐國みな刺青黨として著名である。

その頃は、男のみではなく、笠森お仙、稻屋お六、蟹屋のお靈、花のお勘などの刺青が名高く、良家の子女にも大いに流行し、洗湯などで刺身のないものは、無地といつて輕蔑されたものである。當時の刺青師の名人は、淺草馬道の市松、彫岩、達磨金、石町の奴平、唐草權太等々であつた。

◇

明治五年四月にも、太政官々令で、刺青を禁止したが、それでもこの風習はやまなかつた。

明治初年の當路の大官で刺青の美事だつたのは西鄕從道であつたさうである。それは背中一面に火のやうな櫻の花、背から腹へかけて五臺山の魯知深大和尚が、虎の如くに立はだかつて六十二斤の鐵杖を振廻してゐるといつた傑作だつた。

この西鄕侯が、毒婦雷お新（大阪醫大に彼女の刺青の剝製が殘つてゐる）と刺青競べをしたといふことは有名な逸話である。お新の刺青といふのがまた、西鄕侯に劣らぬ美事なもので、背中に辨財天と北條時政、臀部には雲をよぶ六角の蛟龍、左右の股には岩見重太郎大蛇退治、腹は九紋龍史進と花和尚魯智深、右腕は金太郎、左腕も人物四、五人と緋櫻、全身に都合十人物と六頭の龍、一本の櫻、雲、濤、鉞など寸分の隙もなく悉く朱を入れて彫つてゐたので、さすがに刺青自慢の西鄕侯も參つてしまつたといふのである。じつに朋かなはなしである。

こころが西鄕侯には、もう一つ刺青挿話がある。侯の使つてゐた諸生の、幼少の頃別れた父親といふのが白金の六藏といふ老賊で、それが自分の倅が厄介になつてゐる邸とは知らず忍び入つたが倅に見つかる。しかるにその諸生と親子の名乘りをあげることも出來ずに別れてしまふ。

それから三月ほど經つて、六藏は吾子の顏が見たさに再び西鄕の邸に忍び入つたが、そのときは倅は、開拓使十三等出仕に出世して北海道へ赴任したのちだつた。かくて老賊は、捕へられて西鄕の面前へ引出されたが、そのとき、西鄕侯は、老賊六

藏と刺青競べをして、刺青にことよせて、北海道の倅のところへ落してやるといふ筋、少し作り話めく實話である。

銀座一丁目に松淺といふ料理店があつたが、こゝの女將が生首お源といふ吉原の藝者上りで、背中に大たふさの生首、双腕に昇龍と降龍の刺青があつた、また湯島天神の竹治といふ藝妓は、腹に鉞を怒らし相撲たんとする蟹、背にごくろを卷いたうはばみを彫つてゐて、醉ふと裸踊りをやつて人氣を博したといふが、これらの女性たちも、西鄕侯は醉狂に刺青競べをやつたといふことも傳へられてゐる。

◇

今日では、刺青は餘り見られなくなつた。が、錢湯などへ行くと、小泉の又さんみたいなくりからもんもんの老人を時々見うける。火消や、鳶や、博徒のむかしの名殘りを偲ばせるものがある。

いつぞや私は、市電の中で、世にも珍らしい刺青の老人を見た。それはもちろん着物を纏ふてゐるから腹背の刺青がわからなかつたが、彼の顏面と兩手にいつぱいに何やら細かな刺青がしてあつた。眼と唇と、兩手の掌と爪をのぞいて、いつぱいの青黑い刺青、それに朱を施してあつたので、これほどのグロは容易に見られるものではないとおもつて、私は、彼老の降りるところまで、乘過して隨いて往つたわけである。

今日では、情事にことよせて相手の男女の名の頭文字を彫るものがある。二の腕などへ彫つてゐるが、中には洋風に羅馬字を一字彫つて得意がつてゐるキザなのも見受ける。川柳にこんなのがある。

母の名が親父の腕にしなびてる

むかしの情怨濃やかなりしころの記念でもあらう。

また職業を現はした單純なのもある。鳶職は、まとゐを、魚屋は魚を、といつた風に、それから迷信のために彫るものも案外多いものである。幸運が轉り込むやうにと骰子を彫るもの、厄年に墓標を彫つたり、泥棒などは暗夜に物の見分けがつくやうにと鼠や蝙蝠や渡邊綱を彫り、藝者は三味線を、娼婦は蟹を彫る等々。

さらに、改心とか發奮のために刺青をするものもある、芝居の一心多助は右の腕に「一心」と彫つてゐたが、忍耐とか、克氣とかいふ文字を彫つてゐる人を見受けることがあるが、その人の前半生といつたものが、いろ〳〵と想像されるものである。

◇

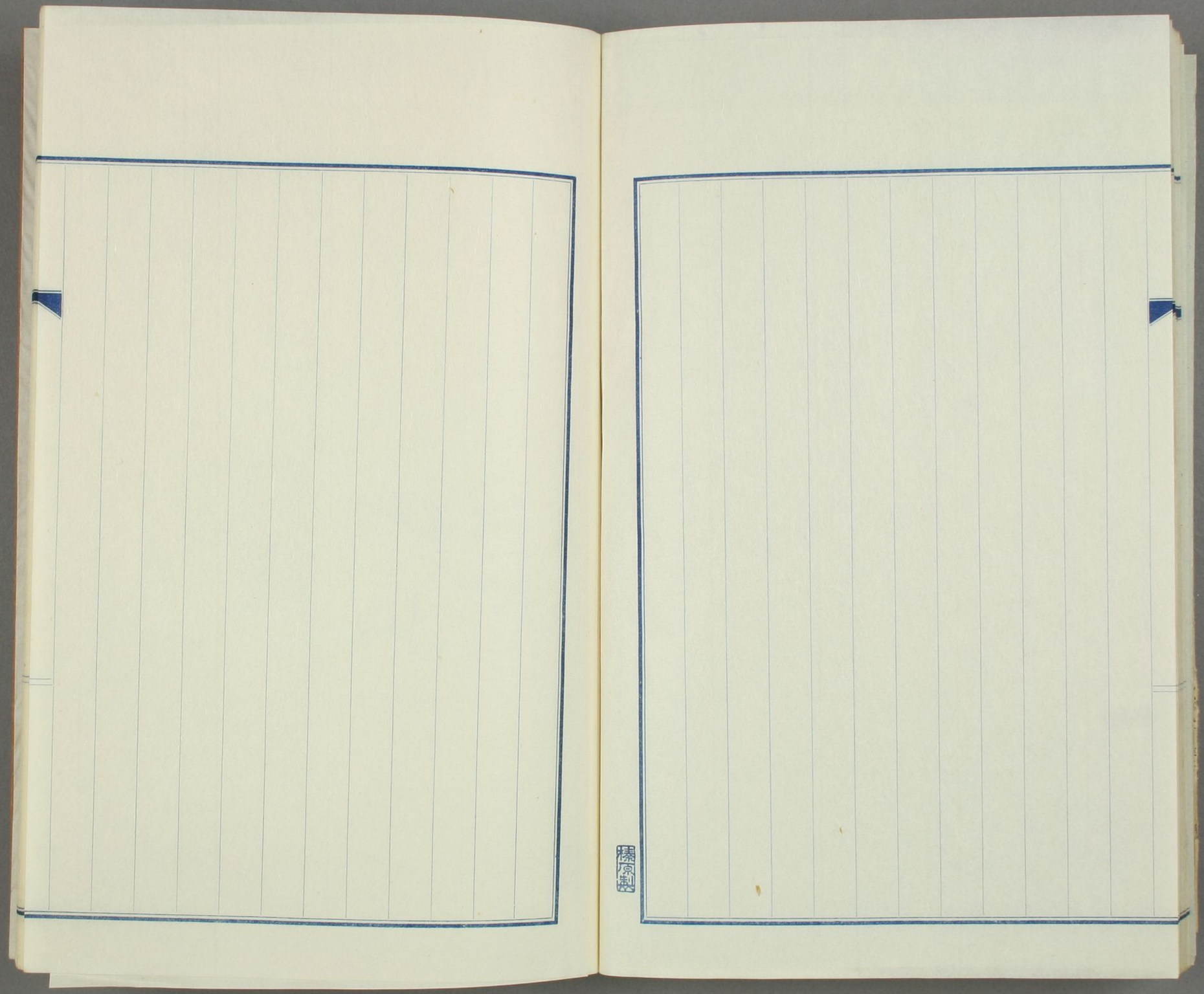
普通刺青は兩腕が一番多い。それから上股、背から腰にあたつて彫るのが相場、胸腹大腿下肢などが割合に少い。兩手指先などは稀である。ここに前記の老人の如く顏面いつぱいなどゝいふのは珍らしい。

繪柄模樣は雜多である。かんたんなものでは梅櫻桃、少し精密になつて牡丹に巖、唐子稚子童子、麒麟から駒、菊模樣、怪奇な面、など、動物は、大蛇、龍、狸、獅子等が多く、その他妖怪、骸骨、雷神、雷光、生首、幽靈等々、人物は多門丸、鬼若丸、大蛇丸、虎王丸、樋口次郎兼光、朝比奈三郎、源爲朝、辨天小僧、地雷也、八犬傳の人物、水滸傳の人物等、また女の繪柄として撰ばれるのは勇婦、妖婦、毒婦で、板額、清姫、瀧夜叉姫、累、鬼神お松、妲妃のお百、生首お仙、花井お梅、高橋お傳等が普通である。

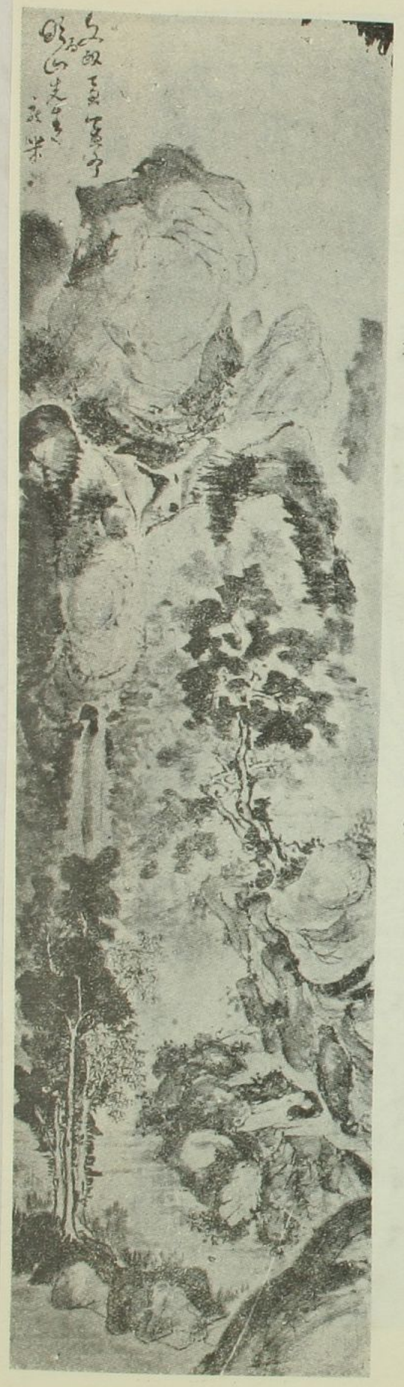
中には、こんな珍奇なのもある、むかし越後の新潟で、夫殺しのうへに放火までやつたこんでもない毒婦があつた。吟味のうへ斬罪といふことになつた。刑場へ引立てられ荒莚のうへに坐つてまづ荒繩を切り落すと、首のつけ根から背筋へかけて「東照大權現」といふ刺青がしてあつたので、檢死の役人たちも驚き呆れたが、いやしくも神君の御諱に對して及を加へることは畏多いとあつて、合議の結果、追放となつたといふのであるが、これはあまりにつくり話めく。

◇

谷崎潤一郎の「刺青」は、彼の一代の名作であらう。吉川英治にも刺青を取材にした横濱を舞臺にした小說がある。また白井喬二の大作「富士に立つ影」にも刺青が取扱はれてある。佐藤菊太郎の戀女お染が築城爭ひの敵方熊木伯典のために雪をあざむく二の腕に「歸伯典」の三字の刺青をされるといふので、「これ無針の早入墨、藍龍の毒汁に漢土を煉つてこしらへたのがその塗料、皮下五分底まで浸み通つて針打ちよりも深いといはるゝのか早入墨の特長」と、まことしやかに書いてあるが、もとより白井一流の出鱈目だか、出鱈目にしろあそこは「富士に立つ影」全卷中の白眉であらう。白井喬二空想の最高頂に達した產物である。



以下
9丁
白紙



青木木米筆　山水　半切淡彩

與謝蕪村筆　青綠山水　立三尺八寸一分　巾一尺六分

閲覧室

榛原製